CIRAS Discussion Paper No.85

社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族３

装いと規範 2

更新される伝統とその継承

帯谷知可・後藤絵美 編

京都大学東南アジア地域研究研究所

CIRAS Discussion Paper No. 85

社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族 3

装いと規範 2

更新される伝統とその継承

帯谷知可・後藤絵美 編

京都大学東南アジア地域研究研究所

CIRAS Discussion Paper No.85
Chika OBIYA and Emi GOTO (eds.)
Fashion and the Norms 2:
Updated Tradition and Its Succession
(Islam, Gender and Family in Relation with Soviet-Socialist Modernity 3)

©Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
46 Shimoadachi-cho, Yoshida Sakyo-ku, Kyoto-shi,
Kyoto, 606-8501, Japan

TEL: +81-75-753-7302
FAX: +81-75-753-9602

March, 2019

表紙右上写真：©akiyoko—fotolia

目次

序言
帯谷 知可（京都大学東南アジア地域研究研究所）／後藤 絵美（東京大学東洋文化研究所）…… 4

■報告１
ヴェールを纏う女性たちの語り
――現代パキスタン都市部におけるパルダ実践を事例として
賀川 恵理香（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士一貫課程）…… 7

■報告２
「伝統」を超えて
――現代トルクメン女性と民族衣装コイネック
岡田 晃枝（東京大学大学院総合文化研究科）…… 23

■報告３
近代日本の国家主義・帝国主義とキモノ
森 理恵（日本女子大学家政学部）…… 34

コメント１
後藤 絵美…… 43

コメント２
帯谷 知可…… 45

コメント３
酒井 啓子（千葉大学法政経学部）…… 47

ディスカッション…… 50

付録 …… 59

序言

本ディスカッション・ペーパー『装いと規範２── 更新される伝統とその継承』（CIRAS Discussion Paper No. 85、2019年）は、ワークショップ「装いと規範」第２回（2019年２月９日、京都大学稲盛財団記念館にて開催）の記録を基にしたものである。このワークショップは、新学術領域研究（領域提案型）「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて── 関係性中心の融合型人文社会科学の確立」（「グローバル関係学」、領域代表：酒井啓子、千葉大学）の計画研究B01「規範とアイデンティティ── 社会的紐帯とナショナリズムの間」（研究代表者：酒井啓子）、および京都大学東南アジア地域研究研究所CIRAS共同利用共同研究・個別ユニット「社会主義を経たイスラーム地域のジェンダー・家族・モダニティ── 中東イスラーム地域研究との架橋をめざして」（代表：和﨑聖日、中部大学）の主催、同CIRAS共同利用共同研究・複合ユニット「秩序再編の地域連関」（代表：村上勇介、京都大学東南アジア地域研究研究所）、同統括プロジェクト企画研究「アジア太平洋地域における変動動態と21世紀秩序の構築」（代表：帯谷知可、京都大学東南アジア地域研究研究所）、京都大学東南アジア地域研究研究所環太平洋研究ハブ形成拠点（代表：村上勇介）の共催により実施したものである。

これはまた、前年度2018年２月10日に開催した同タイトルのワークショップ「装いと規範── 現代におけるムスリム女性の選択とその行方」の第二弾でもあった（その成果は、帯谷知可・後藤絵美編CIRAS Discussion Paper No. 80として2018年３月に刊行した）。これらのワークショップを企画するにいたった経緯については上記報告書の序言で言及しているのでそちらをご参照いただきたい。今回のワークショップは、前回の主題を継承しながらも、イスラーム圏の事例に限定せずに、国家やイデオロギーと装いをめぐる問題を、「関係性」を意識しながら議論することとした。

今回のワークショップの趣旨は次の通りである。「装いは、価値観や信念、思想、規範など、目には見えないものを映し出す鏡である。その時々のファッション（流行の装い）に目を向けたとき、我々は、それぞれの時代の人々が、どのような美意識を持ち、何を大切にしていたのか、そして、どのような枠組みの中に生きていたのか、その一端を知ることができる。本ワークショップでは、現代のイスラーム圏および日本における事例を通して、装いから何が見えてくるのか、そこにおいて『現代』『国家』『イデオロギー』がどのような意味をもちうるのかを検討していく。」

本ワークショップでは、前回と同様に、「装い」という言葉を厳密な枠にはめることなく、衣服・衣装だけでなく、装飾品、化粧品、髪型などまでもその中に含めている。そうしたさまざまな「装い」に光をあてることで、近現代における国家という枠組みや、イデオロギーのありようを浮かび上がらせ、それがどのような意味をもちうるのかを考えることを目指した。

報告者は賀川恵理香（京都大学）、岡田晃枝（東京大学）、森理恵（日本女子大学）の３名、

コメンテーターは酒井啓子（千葉大学）、帯谷知可（京都大学）、後藤絵美（東京大学）が担当した。総合司会は和崎聖日（中部大学）が務めた。当日は学部生、大学院生、および、遠方からお越しいただいた研究者の方も含めて、総勢15名ほどの参加者を得られた。当日のプログラムは59ページに掲載している。

第一報告、賀川恵理香「ヴェールを纏う女性たちの語り――現代パキスタン都市部におけるパルダ実践を事例として」は、これまで「女性隔離」としてしばしば観察者や分析者から「女性抑圧」と結びつけられたり、批判的に検討されたりしてきたパルダについて、それが現代の都市部高学歴女性のあいだでどのように理解され、実践されてきたのかを明らかにするものであった。2017年と2018年にラーホールの公立大学で実施した参与観察と質問票による調査から、賀川は、女子大学生らがパルダを、「身体を覆う規範」や「内面的な美しさを保つ規範」の実践であると解釈していたこと、それらの規範の目的として、「男女の不倫な関係を避けること」という、イスラーム法学者が提示してきた筋書きが共有されていたことを指摘した。さらに、そうして実践されるパルダが、決まった形のヴェールで体を覆う／覆わないという二択によるものではなく、状況に応じて、どの部分を何でどのように覆うのか（あるいは覆わないのか）が変化する、柔軟なものであることも明らかにした。

第二報告、岡田晃枝「『伝統』を超えて――現代トルクメン女性と民族衣装コイネック」は、1991年の独立後のトルクメニスタンでみられた、服装の統制を扱ったものであった。1990年代はじめに、コイネックとよばれる「伝統的な」ワンピース型の衣服と帽子が小中学生の制服として導入され、後に高校や大学の学生や教職員、テレビ局のキャスターも含む一部の公務員にも着用が義務づけられた。この服装統制の背景には独立後の国民統合の意図があったという議論や、それを権威主義体制による国民の抑圧だとする言説があることを紹介したうえで、岡田は、自身の観察では、トルクメニスタンでの服装統制は必ずしも抑圧的なものではなかったこと、むしろ、近年には服装やファッションの選択肢や新展開の広がりがみられることを指摘した。

第三報告、森理恵「近代日本の国家主義・帝国主義とキモノ」は、大日本帝国下のアジア地域で、誰が、どのような意図で、キモノを着ていたのかという問いを複数の事例をもとに検討するものであった。森によると、1910年代の台湾で撮影された記念写真や1930年代の朝鮮の画家の肖像写真からは、キモノが男女の「近代服」や「大日本帝国下の日常着」として用いられていた場合があったことが読み取れるという。その一方で、太平洋戦争期の前後から、日本の象徴としてのキモノや、融和政策の一環としてのキモノという意識が強くなっていった。あるいは、1940年代のシンガポールや中国では、キモノが「からゆきさん」を象徴するものとして「堅気の日本人女性は着るべきではないもの」という意識もあった。

以上の三つの報告は、いずれも、同じ装いに、複数の主体が「価値観や信念、思想、規範」を読み取っているさまを浮かび上がらせるものであった。とくに、外部の観察者や分析者

がもつイメージや評価と、それを自ら用いる人々の意図とのずれの存在が明らかになった。装いとは、時代や地域、実践者それぞれのコンテクストに落とし込みながら、慎重に分析する必要があるものだということが再確認された。

報告に続くコメントとディスカッションでは、一定の装いに対して向けられる視線と「見る／見られる」という意識、装いに関する複数の規範の重なり合い、制服や服装管理の背後にある原理への着目など、具体的な事例をふまえて重要な視座が提示された。また、常に更新されていくものとしての「伝統」の在り方についての認識を参加者間で共有することができた。

第１回のワークショップでの議論に加えて、今回は、ヴェールや女性の覆いに関する地域間比較、宗教や国家の要請と共同体や個人の選択が交渉しせめぎ合う場としての装い、装いをめぐる関係性のポリティクスが重要な論点として浮かび上がった。今後も、ワークショップを継続開催し、議論を深めると同時に、その裾野をさらに広げていくことができればと願っている。

なお、本ディスカッション・ペーパーは、新学術領域研究（領域提案型）「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて── 関係性中心の融合型人文社会科学の確立」（「グローバル関係学」、領域代表：酒井啓子、千葉大学法政経学部教授、研究課題／領域番号1801）計画研究Ｂ01「規範とアイデンティティ── 社会的紐帯とナショナリズムの間」（研究代表者：酒井啓子、研究課題／領域番号16H06549）の2018年度の研究成果の一部として出版するものである。

2019年3月

帯谷 知可・後藤 絵美

報告1

ヴェールを纏う女性たちの語り

現代パキスタン都市部におけるパルダ実践を事例として

賀川 恵理香　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士一貫課程

私が研究対象としている地域はパキスタンです。学部のときに大阪大学の外国語学部でウルドゥー語を専攻していて、そのときに1年パキスタンに留学しました。それでパキスタンをもう少し研究したいと考えて、京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科に入学いたしました。現在、博士一貫課程の2年目で、先々月に修士論文を提出し、やっと一区切りついたところです。

1. 本研究の概要

はじめに本研究の概要について説明します。研究課題は「現代パキスタンにおけるパルダ概念――都市高学歴女性の語りを通して」です。研究の背景は以下のとおりです。まず、パルダとは「インド、パキスタン、バングラデシュを中心とした南アジア地域に広く存在する性別規範のことであり、男女の生活空間を分離することによって、または女性が衣類を用いて象徴的な隔離空間を作り出すことによって実践されている」と定義されています[Papanek 1973]。

資料1－1はパルダにおける女性の被服の一つの事例です。左側の2人は全身を黒い衣装で覆っていて、右側の4名はシャルワール・カミーズというパキスタンの民族衣装を着ています。このようにパルダの実践としての被服にも、多様な方法が存在しています。

資料1－2は、とある結婚式会場の写真です。右手が女性の席で、左手が男性の席という形で男女の座る場所が分かれています。これは親族しか集まらないという前提の結婚式の会場です。男性が女性と肩を組んで写っていますが、これは親族男性と親族女性なので、ここではそれほど奇妙なことではないということが言えます。

パルダは、女性の健康、就学、就業などあらゆる面で女性の生活に悪影響を与えるとして、批判の対象となってきました。しかし、現代パキスタン都市部においては、さまざまな空間、場所を横断する女性たちが存在しています。このような女性の行動は、「女性を公的空間から隔離する」という女性隔離の価値観からすれば、規範からの逸脱ともとれます。さらに、彼女たちの多くは状況に応じてヴェールを脱いだり纏ったりしており、その被服の方法は「象徴的な隔離空間を作り出す」という観点からも、これは逸脱と解釈することが可能です。

ここで、都市部の女子学生による状況に応じたヴェール着脱の事例を一つ紹介します。資料1－3をご覧ください。この写真は、都市部の共学の大学の敷地内で撮られたもので、彼女たちはこれから家に帰ろうとしています。真ん中の3名は黒い衣類で全身を覆っています。次に資料1－4をご覧ください。

資料1－1　パルダにおける女性の被服の一事例
筆者撮影

資料1－2　結婚式会場
筆者撮影

資料１－３　大学敷地内の女子学生
筆者撮影

資料１－４　大学建物内の女子学生
筆者撮影

発表者の私も真ん中に写っていますが、他に写っているのは、実は資料１－３の女性と同じで、これは大学の建物内で撮られたものです。資料１－３では黒い衣類で全身を覆っていた３人の女性たちは、みんなそれを脱いだ姿で写っています。頭を覆っている女性もいれば、覆っていない女性もいます。大学は共学なので、もちろん男性と接する機会も大いにあります。しかし、このように大学の中と外で、大きく被服の方法を変える女性たちが存在しています。

それでは、彼女たちはパルダの規範から逸脱した存在なのでしょうか。発表者の調査によれば、伝統的なパルダ規範から逸脱していると取られてもおかしくない女性たちの多くは、パルダ規範を実践していると自己認識しています。すなわち、彼女たちにとっては、自らの装いや振る舞いとパルダの規範に矛盾がないと言えます。では、彼女たちにとってのパルダ規範とは、どのようなもので、彼女たちはどのような観点においてパルダを実践しているのでしょうか。このような問いのもと、本発表においては女性たちの語りに焦点を当てた分析を行います。

本発表においては、2017年と2018年の夏に実施したフィールドワークのデータを用いつつ、ヴェールを纏う女性たち自身による、パルダに関する語りを分析します。そのうえで、提出済みの修士論文の内容と対応させながら、論文全体の流れを示します。修士論文の章立てに関しては、付録の資料に書いておりますので、よろしければご参照ください。

２. 先行研究の検討と本研究の問い

続いて先行研究の検討を行います。本研究では、パルダの先行研究とヴェールの先行研究、両方を参照しました。最初に扱うのはパルダの先行研究です。

南アジアにおけるパルダ研究の端緒は、1960年代、1970年代に求められるとされています［Papanek 1973: 290］。初期の研究では、パルダを性別役割分業の制度として分析した議論が多く見られます［Papanek 1973; Pastner 1974］。その後、社会経済状況の変化に伴って、パルダの実践も変化すると主張する議論が多くなっていきます［Feldman & McCarthy 1983; 池田 1993; Haque 2003］。ここからは、女性たちがどのような社会経済状況に置かれているのかというコンテクストを精査する必要性があることがうかがえます。

同時に、男女の分離（segregation of the sexes）や女性隔離（the system of secluding women）の側面は、依然としてパルダ概念に所与のものとしてみなされていると言えます。しかし、現代パキスタン都市部における女性の装いや振る舞いの方法は、先ほどお話しした状況に応じたヴェールの着脱の事例に見られるように、女性隔離としてのパルダという既存の枠組みでは説明できないと言えます。ここから、女性隔離の制度をパルダ概念に所与のものとする視座を乗り越える必要性があるのではないかと考えました。

次に検討するのはヴェールについての先行研究です。ヴェール研究は、1970年代に始まるヴェール化現象を契機に盛んになったと言われています[1)]。この現象を受けて、女性がヴェールを纏い始めた契機を分析した研究や［後藤 2014; 野中 2015］、ヴェールを纏うことによって自身や自身を取り巻く社会関係に起こる影響を論じた研究［Mahmood 2005］、ま

1）そもそもムスリム女性のヴェール着用は、19世紀末に中東諸国の後進性の象徴として内外の知識人層の非難を浴びたことにより、20世紀初頭から半ばにかけて大幅に減少していた。しかし、1970年代後半以降のイスラーム復興に伴い、都市に暮らす高学歴女性の間でヴェールの着用が急増し始めたという背景がある［後藤 2014］。

たヴェールを纏う意義を分析した研究［Khurshid & Shah 2017; 田中・嶺崎 2017］など、さまざまな研究がなされてきました。ここからは、ヴェールを纏う理由や意義を、地域的な文脈に落とし込んで考察する必要性があることが読み取れます。しかしこのなかでも、本研究で解説しているような状況に応じたヴェールの着脱という具体的な行為に言及した研究は少ないと言えます。よって、パキスタンの文脈において、女性たちがなぜ、どのようにヴェールを纏ったり、脱いだりするのかを明らかにする必要性があると考えました。

以上の検討を受けて、本研究の目的は、現代パキスタンにおける都市高学歴女性たちにとってのパルダ概念の変容とその実践を明らかにすることです。研究の問いは二つ設けました。一つ目は、「①現代パキスタンにおける都市高学歴女性にとって、パルダはどのような規範として存在しているのか」、二つ目は、「②女性たちはなぜ状況に応じてヴェールを脱いだり纏ったりするのか」という問いです。

3. パルダとは何か

ここではパルダの概観として、パルダのイスラーム法学上の意義付けについて説明します。パルダの原義はペルシャ語で「カーテン、幕」を指し、男性と女性の世界、内と外を分ける仕切りを意味すると言われています［麻田・中谷 2012: 628］。パルダの定義は先ほども申し上げましたとおり、一般的には男女の分離や女性隔離の制度であると定義されており、その実践として身体的に居住空間を分離することと、女性が顔や体を隠すことの二つの側面が存在するとされています。

女性の被服というのは、そのなかでも象徴的に隔離空間を作り出すこととして分析されており、ハンナ・パパネクはこれを「持ち運び可能な隔離」であると言っています［Papanek 1973］。このようなパルダは、しばしば女性のモビリティを著しく制限するとして、女性に対する抑圧的な制度としても論じられてきました［White 1977］。

パルダという語の使用ですが、南アジア全体、主にアフガニスタン、パキスタン、インド、バングラデシュで広く用いられています［Haque 2003: 48］。パルダはムスリムだけではなく、上位カーストを中心としたヒンドゥー社会においても存在が指摘されています［Papanek 1973; 中谷 1995; Haque 2003; 麻田・中谷 2012］。

ただし、ヒンドゥー教徒の間では、パルダにイスラーム教徒とは異なる意味付けが与えられていると指摘されています［麻田・中谷 2012: 628］。また、ヒンドゥーとムスリムのパルダの実践の違いは、その適用範囲にも表れていると言われています［Papanek 1973］。ヒンドゥー教徒では親族関係の内部でもパルダ制度が適用されるのに対して、イスラーム教徒では主に親族関係の外部において適用されると言われています。さらに、パルダ実践のその様子や意義付けは、地域、宗教、階級、カースト、職業、年齢によってさまざまに異なるとも言われています［Haque 2010: 303］。

続いて、パルダのイスラーム法学上の意義付けについてお話しします。ここでは、パキスタンにおける高名なイスラーム法学者であるサイイド・アブル・アアラー・マウドゥーディー（Saiyid Abū al-A‘lā Maudūdī, 1903–79）によるパルダのイスラーム法的解釈を扱います。このマウドゥーディーの著作として『パルダ』という本があって、そのなかでマウドゥーディーは、クルアーンの第24章の30節、31節、第33章の部族同盟章の32節、33節、59節に言及しています。資料１－５にクルアーンの訳を載せていますが、こちらはマウドゥーディーがクルアーンからウルドゥー語に訳したものを、私が日本語に訳して載せています。

マウドゥーディーはその言及のなかで視線を下に向けることに関する解釈を述べ、これらの章句においては、視線を下に向け、体を隠すこと以上の含蓄があると主張しています。マウドゥーディーが抜き出した部分を引用します。

> ……一般的に、この言葉（*ghaẓ-e-baṣar*）の翻訳は、「視線を下に向けろ」とされるが、これは十分な翻訳ではない。この章句で示されているのは、常に下を向いていて、決して頭を上に向けてはいけない、ということではない。むしろ、本来の意味においては、ハディースで「目の姦通（*ānkhoṇ kā zinā*）」として示されているものを避けなさいということなのである。〔つまり、〕見知らぬ女性の美しさ、そして彼女の身に着けている装飾品を見て、〔性的な〕楽しみを得ることは男性にとって姦通の理由となる。そして見知らぬ男性の視線の対象となることは女性にとっ

資料１－５　マウドゥーディーによるクルアーン解釈

第24章　光り章（Sūrrah Al-Nūr）　**30節、31節**

【マウドゥーディー訳】預言者よ！男の信仰者たちに言いなさい。自分の視線を下に向けて、貞操を守っておくようにと。これは彼らにとっての貞操を守るための方法なのである。アッラーは彼らの行いを間違いなく知っている。そして信仰者の女性たちに言いなさい。自分の視線を下に向けて、貞操を守り、おのずと顕わになる美しさ以外に、自分の美しさを顕わにしないようにと。自分の胸元を大きなチャーダル（*auṛhniyoṇ ke bakkal*）で覆うように。そして、夫、父、義父、息子、継子、兄、兄弟の息子、姉妹の息子、自分の女たち、自分の奴隷、女性に何の興味も持たない使用人の男たち、まだ女性のパルダに関する知識を持たない男児以外に自分の飾りを見せぬよう。（彼女たちにこれも言いなさい。）歩くときに自分の足を、隠している飾りが（音のせいで）顕わになるほどに、地面に打ち付けて歩かぬよう［Maudūdī 1940: 231-232］。

第33章　部族同盟章（Sūrrah Al-Ahzāb）　**32節、33節**

【マウドゥーディー訳】預言者の妻たちよ！お前たちは普通の女たちとは全く異なるのだ。もしお前たちが敬虔さを受け入れるならば、声をひそめて話してはならない。心に病をもった男が、お前たちに何らかの期待をしてしまわないように。話をするときは、無駄なく簡潔にするよう。そして自分の家に腰を据えて座っていなさい。以前の無明時代のように、着飾った姿を見せて動き回らぬよう［Maudūdī 1940: 232］。

第33章　部族同盟章　59節

【マウドゥーディー訳】預言者よ！自分の妻たち、そしてイスラーム教徒の女性たちに言いなさい。自分の上にチャーダルの面被をかぶるようにしなさいと。それによって、彼女たちは識別され、邪魔されることはないだろう［Maudūdī 1940: 232］。

以上はマウドゥーディーによるクルアーンのウルドゥー語翻訳を発表者が日本語に翻訳した。

> て姦通の理由となる。……よって、何よりもまずその事態を避けることが意図されているのである［Maudūdī 1940: 232-233］。

ここから、男性が女性を性的な視線で見ること、そして女性がその対象となるような装飾品を身に着けることが禁止されていることがわかります。それにさらに言及して、だからといって、この章句は「異性を見ることが決してあってはならない」ということを意味しているわけではないともマウドゥーディーは述べています。

> 人間が目を開いて生活していたら、すべての事物に視線がいってしまうのは当然のことである。男性が女性を、そして女性が男性を絶対に見ないということは可能ではない。だからこそ、預言者は以下のようにおっしゃったのだ。「偶然目がいってしまうことは許されるが、一度見て美しいと感じた事物をもう一度見たり、じっと見つめるような真似をしたりすることは禁止されている」［Maudūdī 1940: 233］。

すなわち「預言者の意図するところは、異性を見ることを全面的に禁ずることではなく、姦通を防止することである」とマウドゥーディーは述べています［Maudūdī 1940: 235］。

さらに、女性の被服の方法に関する解釈についても述べます。マウドゥーディーは、第33章の59節の部分に関して、クルアーンの解釈者たちが揃って「顔覆いを意味する章句である」と解釈していると指摘しています。

> この章句〔第33章　部族同盟章　32節、33節、59節〕はとくに顔を隠すことに関して述べたものである。*jalābīb*とは*jilbāb*の複数形であり、チャーダルを意味する。*adnā'*は*arkhā'*、すなわち「かける」という意味である。*yuduniyna 'alayhinna min jalābiybihinna*を字義通りに訳すと、「自分の上に自分のチャーダルのうち、一つの部分をかけるようにしなさい」となる。まさにこれは、グーンガト[2]をかけることを意味している。しかし、この章句は、通例グーンガトとして解釈されるような特定の衣装を意味しているのではない。むしろ〔ここでは、〕顔を隠すことが意図されており、それがグーンガトによってなされようと、ナカーブによってなされようと、または他の手段でなされようと〔変わらないのである〕。もし

2）グーンガトは、頭の上から布を垂らして顔を全体的に隠す面覆い。ナカーブ（ニカーブ）は、ヒジャーブ（ヘッド・スカーフ）で余った布を顔の横から鼻から下を覆うようにもってくるかたちで用いられる面覆い。

イスラーム教徒の女性がこのように自らを覆って外出すれば、人々は彼女が高貴な女性であり、恥知らずではないということを知ることができるため、彼女に嫌がらせをする人はいない。これにはこのような利点がある［Maudūdī 1940: 247］。

ただし、井筒俊彦訳のクルアーン解釈においては、この章句は「長衣で頭から足まですっぽり体を包み込んで行く」ことを命じているとされています。さらに後藤絵美先生の研究でも、ジルバーブの形状や纏い方について、「女性と違うジルバーブを頭から被り、顔を覆い、片目を出した」という伝承や「ジルバーブを額の上に巻き付けた」という伝承など、諸説があると述べられています［後藤 2014: 60］。このことから、この章句は女性が体を覆う方法について述べた章句であるという点でイスラーム法学者の意見は一致しているものの、その具体的な方法や用いられる衣類についての解釈は分かれていることがわかります。

以上をまとめると、マウドゥーディーによるパルダ解釈においては、そもそも女性が家の中に留まらなくてはならないといった前提は、とくに言及されていません。つまりマウドゥーディーはパルダを女性隔離という観点からは解釈しておらず、むしろ見知らぬ男性と女性が対峙する可能性が十分にあると想定したうえで、そこでどのように振る舞い、装うべきかについて論じています。

これらをまとめると、以下のようになります。マウドゥーディーの視点において、パルダとは男女の不倫な関係――ここでは既婚者が配偶者以外と性交渉を行うことでなく、婚前交渉や結婚前の男女交際なども含むより広い概念――を抑制するという男女関係のあり方を規定する概念であると言えます。

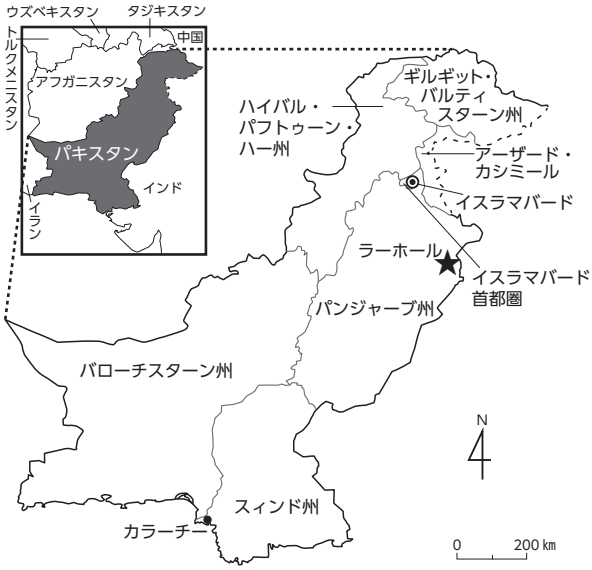
4. 事例紹介

調査地の概要と調査対象および調査方法

最初に調査地概要と調査対象について述べます。調査日程は、先ほど申しましたとおり、2017年の夏、2018年の夏、計３か月半実施しました。調査の対象地は、資料１－６の地図にありますように、パンジャーブ州の州都ラーホールです。ラーホールは人口約1,100万の大都市で、インドとの国境に近い場所に位置しています。ムガール朝期の建築物が残る、とても歴史の古いまちです。

移民の多いカラーチーとは異なって、ラーホールにはパンジャービーと呼ばれる民族集団が多く居住しており、その割合は1998年の国勢調査によると、85.7パーセントにも上るとされています。とはいえ、ラーホールには進学、就職、結婚などの理由で、近隣地域から移住する人々が多数存在しており、とくに大学などの高等教育の現場においては、さまざまな地域出身の学生が見受けられます。

資料１－７はラーホールの中心部にあるバーザールの様子です。かなりごちゃごちゃした様子がうかがえます。バーザールにおいては、店員はほとんど男性です。それに対して、資料１－８のような近代的なショッピングモールも近年増加しています。資料１－９はショッピングモールの内部の写真ですが、先ほどお見せしたバーザールの環境とはうってかわって、清潔で広々としていることがわかります。ショッ



資料１－６　調査対象地ラーホール
筆者作成

資料１－７　ラーホールのバザール
筆者作成

資料１－８　ショッピングモール
筆者撮影

資料１－９　ショッピングモールの内部
筆者撮影

資料１－10　パルダの実践に関する人数・割合

	パルダを実践している	厳格には実践していない	実践していない	無回答	合計
回答人数（割合）	58（83%）	5（7%）	6（9%）	1（1%）	70

出典：筆者作成

ピングモールには、入口にセキュリティ・チェックが設置されていて、さらに至るところにセキュリティ・ガードが配置されていることも多く、バーザールとは大きく環境が異なっています。さらに男性店員しかいないバーザールとは異なり、ショッピングモールには女性の店員も多く働いています。

調査対象者は、ラーホールにある公立大学のパンジャーブ大学とガバメント・カレッジにおいて教育を受ける女子学生です。彼女たちの多くが未婚の二十歳台前後の女性で、社会による性の管理の対象となりやすいということが指摘できます。つまり社会規範を意識した行動が観察されやすいと言えます。

さらに、この二つの大学は、パキスタン国内の公立大学のなかでトップクラスの学力を誇ります。ですから地方出身の学生が多く在籍し、彼女たちの出身地域とラーホールにおけるヴェール着用の実践の違いを比較することもでき、多角的な視点から被服の着用方法を分析することが可能であると考えました。

調査方法は、質問用紙を用いた半構造化インタビューと参与観察です。調査人数は、予備調査で10名、本調査で60名の計70名に行いました。質問用紙は英語で作成し、会話および質問用紙記入言語はウルドゥー語と英語です。調査対象者に関しては、付録資料に調査対象者の一覧を載せていますので、よろしければご覧ください。調査方法としては２人以上のグループ・インタビューの場合と、１人のみの単独インタビューの両方を実施しました。１人当たり約30分から１時間の時間を費やして、長めにインタビューを行いました。

パルダに関する女性たちの語り

資料１−10は、「パルダを実践していますか」という問いに対して、「パルダを実践している」、「厳格には実践していない」、「実践していない」、「無回答」の回答を表にしたものです。

資料１−10からは、全体の８割以上を占める58名の女性たちが「パルダを実践している」と述べていることがわかります。「パルダとは何か」という問いに対する彼女たちの回答では、パルダを「自ら覆うこと」として解釈した語りと、「内面的に美しくあること」として解釈した語りという二つが見受けられました。

①自らを覆うこととして解釈した語りの事例

次に具体的な語りを紹介します。まずはパルダを「自らを覆うこと」として解釈した語りの事例です。

> 「私にとっては、パルダとは私の身体、［すなわち］胸元、臀部、頭を覆うことである。それによって私は快適に感じる」（19番）[3)]

> 「パルダは私にとって、我々の宗教（イスラーム）における義務である。私はパルダのもとに置かれることによって、快適に感じる。クルアーンの部族同盟

3）引用文末の番号は調査対象者を示す。付録資料２、３の調査対象者一覧を参照。

章にパルダの命が下されている。それによると、すべての女性は自らの顔に覆い、〔たとえば〕ドゥパッターを被せなければならない。これがパルダの命である。よって、これはムスリム女性にとっての義務なのである。私はこの命を遂行することに喜びを感じている」(20番)

このドゥパッターというのは、シャルワール・カミーズの３点セットのうちの一つの布です。この布を頭を覆う形で掛けたり、頭と胸を一緒に覆うという方法が取られたりしています。

「パルダとは、それを行うことによって快適に感じることができ、そして邪悪な視線から逃れることができるような事柄である。パルダはイスラームに基づいて着られるべきである。たとえば、アバーヤは体型がわかるほどにタイトであってはならないし、おかしく見えるほどにルーズであってはならない。ヒジャーブは髪の毛を隠しているべきである。〔ナカーブをもしするならば、〕顔が完全に覆われるような形でするべきである」(22番)

アバーヤというのは、首から下を全体的に覆う緩やかな衣装です。通常はヒジャーブと呼ばれるヘッド・スカーフとともに着用されています。資料１－３の真ん中の３名は首から下をこの黒い衣装で覆っていて、上からヒジャーブとして布、ヘッド・スカーフを巻いています。パキスタンでは、このような衣装がアバーヤとヒジャーブと言われています。

「パルダはとても良いものである。それによってすごく保護的(secure)な状態で過ごすことができる。保護的であるとは、まず宗教的な意味合いにおいてあなたの身体のすべてが隠されているということである。〔その状態においては、〕誰もあなたを見ることができない。その観点において、私はすごく良いものとして考えている。〔パルダを実践するには、〕アバーヤを着るとより良い。もしシャルワール・カミーズを着るなら上から大きなチャーダルで身体を覆うべきである。そうすることによって髪の毛が人に見えないようにする〔ことが求められる〕。そして誰かがあなたのほうを見て、魅惑されないような、シンプルな姿で外出するべきである。そのような観点から、自分はパルダを実践している」(34番)

チャーダルというのは、ドゥパッターをもっと厚手にして大判にしたもので、掛けると顔以外はすべて隠れるかたちになります。

「私にとってのパルダとは、自分が他の男性にとっての見世物にならないように自分自身を覆うことである。どのような方法であれ、自分が快適に感じ、誰も私の身体を見ることができないほどに身体が覆われていれば、これは私にとってのパルダである。ナカーブをすることは必須ではない。だから私はナカーブをしていないが、自分の身体をきちんと覆っている」(37番)

「私にとって、パルダとは純粋にイスラーム的な概念である。あなたの美しさは、すべての「婚姻が可能な男性(*na-meḥram*)」から隠されていなければならない。美しさは魅力であり、色彩はあなたを魅力的に見せ、そしてメイクや宝石は〔誰かの〕目を引く。だから、パルダとは、あらゆる面であなたが「婚姻が可能な男性(*na-meḥram*)」にとって、魅力的に見えないようにあなた自身を隠すこと、その方針である」(53番)

②内面的に美しくあることとして解釈した語りの事例

次に、内面的に美しくあることとしてパルダを解釈した語りの事例を四つ紹介します。

「パルダは女性にとっての一つの盾である。それの内部において、女性は守られている(*maḥfūẓ*[4] *rahtī hai*)。パルダ〔の実践〕とともに考え方や心が清らかであることが必要である。〔すなわちそれは、男性を〕魅了しようという目的を持たないということ〔を意味する〕」(６番)

「パルダは女性たちがそれを実践している場合、基本的に女性たちにとっての保護的な盾となる。それは、その人が持っている信仰(*īmān*)の程度によって決まる。羞恥心(*ḥayā*)と信仰(*īmān*)のどちらもが必要である。羞恥心(*ḥayā*)は身体的な外見に表れるものであり、そして信仰(*īmān*)は心の内面における浄性である」(16番)

4) 原義はアラビア語で、ウルドゥー語においては「保存された、保護された」という意を表す。

「私の意見では、視線のパルダを実践すべきである。服装はパルダの基準ではない。私にとっては、人間関係において忠実となり、身体的にも倫理的にも悪いことをしないようにすることがパルダである。私の基準によれば、私はパルダを実践している」(41番)

この視線のパルダというのは、マウドゥーディーの解釈にあった、「視線を下に向けなさい。悪いものを見てはいけない」といったものを意味するということが、ここから考えられます。

「それ(パルダ)は我々の宗教の命令であり、とてもポジティブな側面をもつ。〔それはすなわち、〕安全性(safety)、セキュリティ(security)、満足感(satisfaction)、安らかな生活(easy life)である。視線のパルダ(Purdah of your eyes)を実践すべきである。〔それはすなわち〕悪いものを見ないということ、そして視線を下に向けることである。パルダは私にとって、教育を受けるうえでも働くうえでも支障になっていない。私は完全なパルダの姿で(in full Purdah)公的な会合、ワークショップ、セミナーやランチ、ディナーに出席している」(59番)

パルダに関する女性たちの語りの分析

先に示した事例では、「イスラームの規定を守る」という内容を波線で、「男性を魅了しない」という内容を直線の下線で示しています。事例では、この二つのキーワードが多く出されていました。

さらに、イスラームにおけるパルダの意義付けとしては、男女の不倫な関係の抑制を目的としていたことが挙げられます。ここから女性たちがパルダを、「身体を覆う規範」または「内面的な美しさを保つ規範」であると解釈していること、そしてその規範の目的として「男女の不倫な関係を避けること」を据えていることがわかります。これらのパルダの解釈は、パキスタンにおけるイスラーム法学者の解釈するパルダと一致していると言えます。すなわち、彼女たちにとってのパルダ解釈には、宗教的な側面が強く表れているのではないかと分析いたしました。

ただし、パルダの実践方法、その定義には多様性が存在していることも同時に読み取れます。それに対して、パルダを女性隔離または男女分離の観点から解釈した語りは聞かれませんでした。

すなわちここから、現代パキスタンにおける都市高学歴女性の間で、パルダは自らの装いや振る舞いを規定する規範として存在をしているのではないかと考えられました。これらは必ずしも男女の分離や女性隔離を志向したものではないのではないかと言えます。すなわち、調査対象者の女性たちにとってのパルダ概念とは、男女の不倫な関係を抑制し、男女関係のあり方を規定するイスラーム的な概念として存在していますが、その実践方法には多様性が存在しているということが挙げられます。

被服に関する女性たちの語り

次に、パルダの実践のうちの被服の方法にとくに着目して、その被服がどの程度多様性があるのか、そして状況によってどのように変えているのかを見たいと思います。

調査の結果、彼女たちの被服の方法は、被服の程度という観点から、以下の四つに分類できることが明らかになりました。

資料1－11(1)と(2)の女性は、パキスタンの民族衣装であるシャルワール・カミーズを身に着けています。(1)では頭が覆われていないのに対して、(2)では頭から胸が覆われています。次に、1－11(3)と(4)の女性は、シャルワール・カミーズの上からアバーヤと呼ばれるコートを身に着けています。(3)では顔全体が見えているのに対し、(4)では目だけが見えています。ここでは資料1－11(1)から(4)の順に被服の程度が高くなっているということが言えます。

ここでよく(2)と(3)にはどのような違いがあるのかと聞かれることが多いのですが、(2)の女性はシャルワール・カミーズを着ています。シャルワール・カ

資料1－11　被服の方法と程度
筆者撮影

資料１－12　被服の方法に応じた女性たちのグループ分け

状況に応じた被服の変化の有無	グループ	外出時の被服の方法	人数
無	A	常にアバーヤとヒジャーブまたはチャーダルで身体全体を覆っている（常に⑶or⑷）	10
	B	常にヒジャーブまたはドゥパッターで頭や胸元を覆っている（常に⑵）	11
	C	常にドゥパッターで胸元だけを覆っている（常に⑴）	1
有	D	状況に応じてアバーヤやチャーダルを着たり脱いだりするが、常に何らかの方法で頭を覆っている（状況に応じて⑵or⑶or⑷）	15
	E	状況に応じて頭を覆ったり覆わなかったりする（状況に応じて⑴or⑵or⑶or⑷）	31
無回答			2
合計			70

出典：筆者作成
注１：アバーヤとは、首から下を全体的に覆う緩やかな外衣、ヒジャーブとは、ヘッド・スカーフ、チャーダルとは、厚手の大判ストール、ドゥパッターとは薄手のストールのことである。

資料１－13　「頭を覆わない」と回答した女性の場所ごとの人数

場所	大学内	研究科の中	ラーホールのショッピングモール	大学の外の道	ラーホールのローカルマーケット	出身地域のマーケット
頭を覆わないと回答した人数（複数選択可）	20	19	20	8	3	3

出典：筆者作成
注１：本表に含まれているのは、Eグループの女性たち31名である。

ミーズを着てドゥパッターで頭を覆ったときは、髪の毛がかなり見えていることが多く、風が吹いたら股などがもしかしたら見える可能性があって、もしくはズボンの足が見えているという状態です。あと腕についても風でめくれることもあります。それに対して⑶の女性は先ほどご説明しましたアバーヤを着ていて、髪の毛は完全にヘッド・スカーフで覆われており、風が吹いてもシャルワール・カミーズが見えることがないぐらいに覆われている状態です。

これを受けて、彼女たちの被服の方法をA、B、C、D、Eの五つのグループに分類しました（資料１－12）。

Aは、常にアバーヤとヒジャーブまたはチャーダルで体全体を覆っている。つまり資料１－11⑶と⑷の衣装を常に着ている状態です。そのような女性たちは全体のうち10名見受けられました。

Bグループは、常にヒジャーブまたはドゥパッターで頭や胸元を覆っている。常に資料１－11⑵の格好をしている女性たちです。彼女たちは11名見受けられました。

Cグループは１名ですが、常にドゥパッターで胸元だけを覆っている。つまり常に資料１－11⑴の被服の方法を行っている女性も１名は見受けられました。A、Bグループまでが、状況に応じた被服の変化がないグループです。

いまから説明するのが、状況に応じた被服の変化があるグループのDとEです。Dは、状況に応じてアバーヤやチャーダルを着たり脱いだりしていますが、常に何らかの方法で頭を覆っています。状況に応じて資料１－11⑵または⑶または⑷の被服の方法を行っている女性たちです。

Eグループは、状況に応じて頭を覆っているときもあるし、覆わないときもある。資料１－11⑴から⑷を自在に使い分けているかたちです。

ここから、全体の６割以上を占める46名の女性たちが、外出時に状況に応じて被服の程度を変えていることがわかりました。彼女たちはどのような場面でヴェールを纏って、どのような場面で脱ぐのでしょうか。D、Eグループの女性たちの事例を分析したいと思います。

資料１－13の表は、Eグループの女性31名を対象に、「場所ごとにどのような場面だったら頭を覆わないことがありますか」と尋ねた結果の表です。見ていただくとおわかりのように、大学内や研究科の中またはショッピングモールでは、ほとんど髪の毛を覆わないという人がかなり多い状態です。それに対して右の三つの状況、つまり大学の外の道やローカルマーケットや出身地域のマーケットでは、頭を覆う女性がかなり多く見受けられることがわかります。つまり場所によって被服の程度がかなり大きく変化していることが、ここから読み取れます。

では、なぜ状況に応じて、彼女たちはヴェールを脱いだり纏ったりするのでしょうか。これに対しては

二つの回答が見られました。一つ目は「男性からジロジロと性的に見られることが気持ち悪いから」という、①見知らぬ男性の性的な視線を意識した語りです。もう一つが、「男女関係なく人にジロジロと見られることが不快であるから」という、②性別を問わない他者の視線を意識した事例です。

①具体的な語りの紹介

ここでは四つの事例を紹介します。

「家の周りなどローカルな場所でチャーダルを纏うのは、いろんな種類の人（*har ṭaraḥ ke log*）がいるから。〔対して〕ここ（大学）には教育を受けた人がいる。人々のせいでやっている（被服の程度を変えている）部分もある。……自分の家族の車に乗っているときはローカルではないから、ドゥパッターで頭を覆う程度でいいけれど、バスなどのローカルな場所では、チャーダルで身体を覆わなくてはならない」（62番、Dグループ）

これは②性別を問わない他者の視線を意識した語りの事例であると分析しました。

「ローカル・エリアにいるような人々は無学である。人々は教育を受けていないから、私はチャーダルを使って身体を覆っている。大学内では、教育を受けた人ばかりがいるから、私はチャーダルで身体を覆わない。……ローカル・エリアでは、人々が女性の身体を見るし、ハラスメントのような奇妙な方法で女性をジロジロと見つめる。……ラーホールにはたくさんの人がいる。ラーホールは大きな都市だから、人々も教育を受けていて、女性にとってもとても快適な環境がある。……私の出身地では、人々は無学だから、環境も快適ではない」（15番、Dグループ）

これは①見知らぬ男性の性的な視線を意識した語りと、②性別を問わない他者の視線を意識した語りが重なり合った事例であると分析いたしました。

「自分の出身村[5]は後進的な地域だから、とても気を付けて（*eḥteyāt se*）過ごさなくてはならない。ラーホールと出身地の環境は大きく違う。ラーホールでは、自分の好きなように行動することができる。たとえばドゥパッターを首にかけて歩くこともできる。でも出身村ではそんなことはできない。あそこではアバーヤを着ないにしても、すくなくともドゥパッターで頭を覆わなくてはならない。あそこの人々はジロジロと見てくるし、すぐ噂話をする」（34番、Eグループ）

これは②性別を問わない他者の視線を意識した語りの事例であると分析しました。

「ローカルマーケットではとくにハラスメントなどの危険はないが、男性（若い男性も、歳をとった男性も両方）がジロジロと見てくる。マーケットの店員たちも見てくる」（19番、Eグループ）。

これは①見知らぬ男性の性的な視線を意識した語りの事例であると分析しました。

被服に関する女性たちの語りの分析

では、この①見知らぬ男性の性的な視線や②性別を問わない他者の視線は、どのように分析できるのでしょうか。

最初の「男性の性的な視線を意識している」ということは、田中雅一や嶺崎寛子が述べているような、「ムスリム社会における女性たちが周囲の男性による性的な視線を拒絶するためにヴェールを纏う」という指摘と重なっていると分析できます。

これに対して、性別を問わない他者の視線については、どのように分析できるのでしょうか。私は、これは社会規範を意識した行動だと読み替えることができるのではないかと考えました。すなわち、国全体の識字率が60パーセント未満、高等教育への進学率が10パーセント程度で、女子は9.3パーセント程度であるパキスタンにおいて、彼女たちはかなり少数派であると言えます。

さらに、しばしば１人で移動する機会を持つ彼女たちは、異質な存在として人々のまなざしの対象となりやすいと言えます。彼女たちは人々のまなざしへの対応として、その場において少しでも自らの異質さを軽減させるために、その場の服装様式に従ったかたちで自らの身体を覆っているのではないかと考えました。

ここまで、ヴェールを状況に応じてなぜ纏うのか、

5）ラーホールから車で一時間ほどの距離にある、シェークープーラーの農村のこと。

被服の程度を重くするのはなぜかについて述べましたが、ヴェールを脱ぐことについては触れていなかったので、最後に触れたいと思います。

ヴェールを脱ぐことについて、インドの都市中間層女性の身体技法のあり方を論じた常田夕美子は、「彼女たちが文脈に応じた個別具体的な他者のまなざしを内面化し、それと自らのまなざしを合わせたうえで、それに対する応答として適切な行為を選択している」と述べています。このような分析の視座を用いると、二つの以下の事例をうまく分析することができると考えました。

「〔同性の〕友人たちがショッピングモールではみんな頭を覆わないから、自分も覆わないようにしている。ショッピングモールで頭を覆っていたら周りから浮いてしまう」

「いままでは大学の中でもアバーヤを着ていたが、〔同性の〕友人にアバーヤを脱いで、と何度も言われたから、最近は脱いでいる」。

これらの事例は、同性の友人という個別具体的な他者によるまなざしを受け入れて内面化したうえで、自分の行為をそれに合わせた事例であると分析できます。ただし、彼女たちがヴェールを脱ぐときというのは、個別具体的な他者のまなざしに対応するという側面だけではなく、そこには「おしゃれでありたい」や「ファッションをしたい」という要素が強く存在していることも考えられます。

都市部の大学に進学するにあたって、服装に気を使っているという女性：「通っている大学では、シャルワール・カミーズを着ていると田舎出身であるとか、遅れているとか、そういった判断もなされてしまう。だから、シャルワール（ダボダボのズボン）ではなく、タイトなズボンやジーンズを履くようにしている」

彼女たちは、都市生活を送るなかで、大学内やショッピングモールなど、①見知らぬ男性の性的な視線や②性別を問わない他者の視線を受けにくいと彼女たちが感じている場所においては、自らの出身村では難しいようなファッションを楽しんでいるのではないでしょうか。実際に大学の中でアバーヤを脱いでいるという女性は、以下のように話していました。

「自宅からの通学時はアバーヤを着てヒジャーブを纏い、さらにナカーブをしており、家族には大学内での様子を伝えていない」

さらに、ショッピングモールで友人に合わせて頭の覆いを取っているという女性は、「友だちがそうするから否応なくヴェールを脱いでいる」と話してくれましたが、ショッピングモールでポーズを決めた自撮り写真をたくさん見せてくれて、おしゃれな様子を発信している側面が多く見られました。

女性たちは①見知らぬ男性の性的な視線と②性別を問わない他者の視線を意識しながら、それらが多いと彼女たちが感じる場所においてはヴェールを纏っているのに対し、それらが少ないと彼女たちが感じる場所においては、ヴェールを脱いでファッションを楽しんでいる側面があると言えるのではないでしょうか。このように、パルダという枠がありながらも、状況に応じて女性たちがファッションを楽しむ姿は、パルダの先行研究においては議論されてこなかった点であると言えます。

結論

問いへの応答

最初に、冒頭で出した問いへの応答をしたいと思います。最初の問いは、「現代パキスタンにおける都市高学歴女性にとって、パルダはどのような規範として存在しているのであろうか」という問いでした。これについては、「パルダは『どのような場面でどのように装い、振る舞うべきか』という自らの装いや振る舞いを規定する規範として存在している」と言うことができます。

もう一つの、「女性たちはなぜ状況に応じてヴェールを脱いだり纏ったりしているのか」という問いに対しては、「都市内部や、都市と出身村の間を移動しながら生活を送るなかで、多様な『場（大学、ショッピングモール、マーケット、実家への帰路、実家近くのマーケット）』における、①見知らぬ男性の性的な視線、②性別を問わない他者の視線を意識し、それに対応するためである」と言えます。

本研究の意義

現代パキスタンにおける都市高学歴女性たちにとってのパルダ概念とは、男女の不倫な関係を抑制し、男女関係のあり方を規定するイスラーム的な概念であることを、本研究において明らかにしました。イスラーム的な概念ですが、その実践的な側面については、かなりコンテクストに応じて変わる可変性を有していると言えます。

ムスリム女性の身体をめぐる問題は、アフリカのFGMやフランスのヴェール論争などで、しばしば政治的な文脈で論じられます。こうした現状において、ヴェールを纏う女性を「規範に縛られた存在」として、ヴェールを脱いだ女性を「規範から自由な存在」であるとする二項対立的な議論を乗り越える可能性を秘めているのではないかと考えました。すなわち、パルダという規範を持ちつつも、実践的な側面においてヴェールを脱いだり纏ったりしており、ここでは規範への従属と、そのヴェールの着脱とが結びつかないと言えるのではないかと考えました。

今後の展望

今後の展望について、最後に述べます。本研究においては、調査対象者の社会経済的背景をうまく結びつけて分析することができなかったので、博士課程に進むにあたっては、出身地や経済階層、家族構成などを考慮に入れたうえで、彼女たちが都市で生活しているときと、実家に帰って農村で知っている人がいるときとで、どのように生活が変わるのかという都市と農村との比較も考慮に入れていきたいと思っています。

これに関係して、さらに個別具体的な文脈背景に関しても分析に組み込んでいきたいと思っています。すなわち家族や親戚など知り合いの多い地域を歩くときや、実家の中で客人が来たとき、ラーホールにおいて買い物をするときなど、「いつ、誰と、どこにいるのか」がパルダ実践にかなり関わってくると思いますので、それも調べていきたいと考えています。そのうえで、今回の調査では聞き取り調査をメインにして、参与観察があまりできていなかったので、次の博士論文を書くにあたっての調査においては、参与観察にもう少ししっかり取り組みたいと考えています※。

※ 本発表は2019年2月に提出した博士予備論文に基づいたものである。

付録資料1　修士論文の章立て

序論

第一章 パルダとは何か
- 第一節 パルダの概観
  - 第一項 概念
  - 第二項 パキスタンのイスラーム法学者によるパルダ解釈
- 第二節 南アジア地域におけるパルダ研究
  - 第一項 先行研究の検討
  - 第二項 本研究の視座
- 第三節 ヴェール研究
  - 第一項 ヴェールをめぐる議論形成の背景
  - 第二項 先行研究の検討
  - 第三項 本研究の視座

第二章 パキスタンの概要
- 第一節 南アジアにおけるイスラーム
  - 第一項 南アジアにおける最初のイスラーム化
  - 第二項 ムガル帝国の誕生と衰退
  - 第三項 西洋諸国による植民地化とイスラーム復興
  - 第四項 国民会議派とムスリム連盟の誕生と結託
  - 第五項 ヒラーファト運動の進退と ヒンドゥー、ムスリムの対立
  - 第六項 パキスタン運動からパキスタン独立
- 第二節 パキスタン独立後のイスラーム化の進展
  - 第一項 中央政府による脱イスラーム化の流れ
  - 第二項 ズィアー政権におけるイスラーム化の推進
  - 第三項 ムシャッラフ大統領による対テロ戦争
  - 第四項 民政移管後現在のパキスタン

第三章 現代パキスタン都市部におけるパルダの概念
- 第一節 調査の概要
- 第二節 パルダに関する女性たちの語り
  - 第一項 パルダを実践している女性たち
  - 第二項 パルダを厳格には実践していない女性たち
  - 第三項 パルダを実践していない女性たち
- 第三節 事例の考察

第四章 現代パキスタン都市部における女性たちの被服の意義
- 第一節 被服の方法に従った女性たちのグループ分け
- 第二節 被服に関する女性たちの語り
  - 第一項 Aグループの女性たち（10名）
  - 第二項 Bグループの女性たち（11名）
  - 第三項 Cグループの女性（1名）
  - 第四項 Dグループの女性たち（15名）
  - 第五項 Eグループの女性たち（31名）
- 第三節 事例の考察

結論

付録資料２　調査対象者一覧（本調査）

	形式	年齢	大学	居住地	未／既婚	子供	兄弟	姉妹	父の職業	母の職業	出身地	学歴	家族形態	仕事
1	グ	18	PU	家	未婚	n	2	3	会計担当役員	主婦	Lahore	B.Com	J	n
2	グ	18	PU	家	未婚	n	0	2	?	?	Lahore	B.Com	J	n
3	グ	19	PU	家	未婚	n	1	0	公務員	主婦	Lahore	B.Com	N	n
4	グ	19	PU	家	未婚	n	4	0	店舗経営	主婦	Lahore	B.Com	N	n
5	グ	20	GC	家	未婚	n	2	0	会社	主婦	Lahore	Bsc Hons	N	n
6	グ	20	PU	Hostel	未婚	n	2	1	地主	主婦	Sahiwal	Msc	N	n
7	単	21	PU	Hostel	未婚	n	2	3	労働者	主婦	Qaboola Sharief	MA	J	n
8	グ	21	PU	Hostel	未婚	n	2	3	工場経営	主婦	Gujranwala	M.Sc	Both	n
9	グ	21	GC	Hostel	未婚	n	3	1	会社（ドバイ）	主婦	Fort Abbas	Bsc Hons	N	n
10	単	21	PU	Hostel	未婚	n	0	0	地主	主婦	Khanqah Dogran	MA	N	n
11	グ	21	PU	Hostel	未婚	n	0	1	農家	主婦	Chunian	MA	N	n
12	単	21	PU	Hostel	未婚	n	1	0	軍人	校長	Lodhran	?	J	n
13	グ	21	PU	家	未婚	n	3	3	事業家（退職）	主婦	Lahore	BS	J	n
14	グ	21	PU	家	未婚	n	2	0	公務員	主婦	Lahore	MS	N	n
15	グ	21	PU	家	未婚	n	2	1	地主	主婦	Hasson Abad	MS	J	n
16	グ	22	PU	Hostel	未婚	n	3	3	建設管理職	主婦	Okara	BS	J	n
17	グ	22	PU	家	未婚	n	1	1	公務員	主婦	Lahore	BS Hons	N	n
18	グ	22	PU	家	未婚	n	1	2	事業家	主婦	Lahore	MBE	J	n
19	グ	23	PU	Hostel	未婚	n	1	5	警察	主婦	Kasur	M.Phil	N	n
20	単	23	PU	Hostel	未婚	n	1	2	教師	主婦	Fort Abbas	MA	N	n
21	グ	23	PU	Hostel	未婚	n	0	1	農家	主婦	Chunian	MA	N	n
22	単	23	PU	Hostel	未婚	n	2	0	公務員	教師	Jahanian	M.Phil	N	○
23	単	23	PU	Hostel	未婚	n	1	1	州職員	主婦	Toba Tek Singh	M.Phil	N	n
24	単	23	PU	Hostel	未婚	n	1	2	死去	主婦	Sharaqpur	M.Phil	J	n
25	単	23	PU	Hostel	未婚	n	2	4	農家	主婦	Bahawalnagar	M.Phil	N	n
26	グ	24	PU	Hostel	未婚	n	1	4	教師（退職）	教師（退職）	Okara	M.Phil	J	n
27	グ	24	PU	Hostel	未婚	n	2	4	退役軍人	主婦	Okara	M.Phil	J	n
28	グ	24	PU	Hostel	未婚	n	0	7	医師	主婦	Dera Ghazi Khan	M.Phil	N	n
29	グ	24	PU	Hostel	未婚	n	2	6	事業家	主婦	Rahim Yar Khan	MS	J	n
30	グ	24	PU	Hostel	未婚	n	2	4	銀行役員（退職）	教師（退職）	Gilgit	MA	J	n
31	グ	24	PU	Hostel	未婚	n	0	0	死去	離婚	Layyah	M.Phil	N	n
32	グ	24	PU	Hostel	未婚	n	1	2	教師（退職）	教師	Gujrat	Ph.D	N	n
33	単	24	PU	Hostel	未婚	n	1	2	地主	校長	Bahawalnagar	M.Phil	J	n
34	単	24	PU	Hostel	未婚	n	1	0	地主	主婦	Sheikhupura村	MS	N	n
35	グ	24	PU	家	未婚	n	0	2	宗教政党役員	主婦	Lahore	MBE	N	n
36	単	24	PU	Hostel	未婚	n	2	1	退役軍人	主婦	Gujrat	M.Phil	J	n
37	グ	25	PU	Hostel	既婚	1	2	0	銀行役員、地主	教師	Jhang	M.Phil	J	n
38	単	25	PU	Hostel	未婚	n	1	3	店舗経営	教師	Rahim Yar Khan	M.Phil	J	n
39	単	25	PU	Hostel	未婚	n	1	2	会計担当役員	主婦	Layyah	MS	N	n
40	グ	25	PU	Hostel	未婚	n	2	4	卸売業	主婦	Sialkot	Ph.D	N	n
41	グ	25	PU	Hostel	未婚	n	4	6	法律事務所	主婦	Muzaffargarh	Ph.D	N	n
42	単	25	PU	Hostel	未婚	n	1	3	軍人（バハレーン）	主婦	Sialkot	MS	N	n
43	単	25	PU	Hostel	既婚	0	3	1	事業家,地主	校長	Multan	Ph.D	J	n
44	単	26	PU	Hostel	未婚	n	2	0	店舗経営	教師	Rahim Yar Khan	Ph.D	J	n
45	単	27	PU	Hostel	未婚	n	2	2	退役軍人	主婦	Islamabad	Ph.D	N	n
46	単	27	PU	Hostel	未婚	n	2	3	弁護士	主婦	Sialkot	Ph.D	N	n
47	グ	27	PU	Hostel	未婚	n	3	0	医師	主婦	Sheikhupura	Ph.D	N	n
48	単	27	PU	家	未婚	n	1	1	退役軍人	主婦	Bhimber	M.Phil	N	○
49	単	28	PU	Hostel	未婚	n	1	2	事業家（退職）	主婦	Gujranwala	Ph.D	J	n
50	グ	29	PU	Hostel	未婚	n	2	2	退役軍人	主婦	Bahawalpur	Ph.D	J	n
51	単	30	PU	Hostel	未婚	n	2	5	死去	主婦	?	Ph.D	?	?
52	グ	30	PU	Hostel	未婚	n	2	2	農家	主婦	Chiniot	Ph.D	N	○
53	グ	30	PU	家	未婚	n	1	1	事業家	服飾店経営	Kasur	Ph.D	N	n
54	単	30	PU	Hostel	未婚	n	1	0	事業家（退職）	死去	Gujuranwala	Ph.D	J	n
55	グ	30	PU	Hostel	未婚	n	2	1	事業家	主婦	Rawalakot	Ph.D	J	○
56	グ	30	PU	Hostel	未婚	n	3	3	退役軍人	死去	Gujrat	Ph.D	N	○
57	単	32	PU	Hostel	未婚	n	0	1	農家	主婦	Burewala	Ph.D	N	n
58	単	32	PU	Hostel	未婚	n	0	1	出稼ぎ（スペイン）	主婦	Mandi Bahauddin	Ph.D	N	n
59	単	35	PU	家	既婚	0	3	2	エンジニア	主婦	Swabi(KPK)	Ph.D	N	n
60	単	36	PU	Hostel	未婚	n	2	5	死去	死去	Multan	Ph.D	J	○

付録資料３　調査対象者一覧（予備調査）

	形式	年齢	大学	居住地	未／既婚	子供	兄弟	姉妹	出身地	現在の身分
61	グ	18	GC	家	未婚	n	1	3	Lahore	BA
62	グ	21	PU	hostel	未婚	n	2	1	Pakpathan	MA
63	グ	21	GC	家	未婚	n	3	1	Lahore	BA
64	グ	22	PU	hostel	未婚	n	1	5	Miyan Wali	MA
65	単	22	GC	hostel	未婚	n	1	3	Sheikhupura	BS
66	グ	22	GC	家	未婚	n	1	2	Lahore	BA
67	グ	22	GC	hostel	未婚	n	4	2	Lahore	MA
68	グ	24	PU	家	未婚	n	0	4	Lahore	Internship
69	グ	24	PU	家	未婚	n	2	3	Lahore	Internship
70	単	31	PU	hostel	未婚	n	1	2	Okara	Ph.D

■参考文献

〈日本語・英語文献〉

麻田美晴・中谷純江. 2012.「パルダ」辛島昇・前田専学他編『［新版］南アジアを知る事典』平凡社, 628.

井筒俊彦訳. 1958.『コーラン 中』岩波書店.

Feldman, Shelley and McCarthy, Florence, E. 1983. Purdah and Changing Patterns of Social Control among Rural Women in Bangladesh, *Journal of Marriage and Family* 45 (4): 949–959.

後藤絵美. 2014.『神のためにまとうヴェール：現代エジプトの女性とイスラーム』中央公論新社.

Haque, Riffat. 2003. *Purdah of Heart and the Eyes: An Examination of Purdah as an Institution in Pakistan*, Thesis (PhD). University of New South Wales.

――――― 2010. Gender and Nexus of Purdah Culture in Public Policy. *South Asian Studies* 25 (2): 303–310.

池田恵子. 1993.「バングラデシュの米収穫後処理業における女性労働：パルダ規範の変容をめぐって」『女性文化研究センター年報』7: 63–79.

Khurshid, Ayesha. & Shah, Payal. 2017. Claiming Modernity through Clothing: Gender and Education in Pakistani Muslim and Indian Hindu Communities. *Gender and Education*: 1-16. DOI: 10.1080/09540253.2017.1302077 (Published Online).

Mahmood, S. 2005. *Politics of Piety: the Islamic Revival and the Feminist Subject*. New Jersey: Princeton University Press.

中谷純江. 1995.「インド・ラ-ジャスターン州のラージプート女性の宗教的慣行：ヒンドゥー女性にとっての自己犠牲の意味」『民族学研究』60 (1): 53–77.

野中葉. 2015.『インドネシアのムスリムファッション：なぜイスラームの女性たちのヴェールはカラフルになったのか』福村出版株式会社.

Papanek, Hanna. 1973. Purdah: Separate Worlds and Symbolic Shelter, *Comparative Studies in Society and History* 15 (3): 289–325.

Pastner, McC, Carroll. 1974. Accommodations to Purdah: The Female Perspective. *Journal of Marriage and the Family* 36 (2): 408–414.

須永恵美子. 2014.『現代パキスタンの形成と変容』ナカニシヤ出版.

田中雅一・嶺崎寛子. 2017.「序：『特集』ムスリム社会における名誉に基づく暴力」『文化人類学』82 (3): 311–327.

常田夕美子. 2011.『ポストコロニアルを生きる：現代インド女性の行為主体性』世界思想社.

White, H., Elizabeth. 1977. Purdah, Frontiers: *A Journal of Women Studies* 2 (1): 31–42.

〈ウルドゥー語文献〉

Maudūdī, Saiyid, Abū, al-A‘lā. 1940. Parda (28th edition). Lahore: Islamic Publications Limited.

〈ウェブサイト〉

Province Wise Provisional Results of Census 2017：

http://www.pbs.gov.pk/sites/default/files/PAKISTAN%20TEHSIL%20WISE%20FOR%20WEB%20CENSUS_2017.pdf（2018年12月19日最終閲覧）

■質疑応答

和崎聖日（司会）　イスラーム学的な知見があり、そして場、状況の定義に依存した服装の変化というミクロな生活について、参与観察も十分にあるような、フィールド資料に基づく充実したご報告をありがとうございました。ここでは主に事実関係について、質問がある方はお願いします。

帯谷知可　資料１－９のショッピングモールの写真で、ショウウインドウに洋服が展示されていますね。これはパキスタンではどのような人たちが着るのでしょうか。女子学生たちも着ることがあるのか教えてください。

賀川恵理香　これに関しては私もすごくびっくりしてシャッターを切ってしまったという感じですが、私の見た限りでは、こうした服装をしている人はいませんでした。私が調査したのは公立大学ですが、私立大学で学費も何十倍もするような大学では、ここまではいきませんが、タンクトップなどのような服を着ている女性も見られました。でも、こうした洋服については、「これは誰が買うのかな」と一緒にいた友だちに言うと、「誰も買わないよ」と言っていました。

酒井啓子　事実関係について質問です。おもしろいなと思ったのは、湾岸アラブだとチャーダルとアバーヤとは同じで、頭から被ります。まさにガウンなんですね。ここでは違っていて、しかもチャーダルやアバーヤは場所によって脱いだり着たりするという回答がありましたが、アバーヤが首から下ということになると、脱ぎ着のしやすさがチャーダルとアバーヤとでかなり違うと思います。湾岸で言っているアバーヤやチャーダルは、よほど厳しいというか、きちんとしなければいけないときに口まで隠せるものです。頭から被るので口まで隠せる外向けのものなので、脱ぎ着しやすいと思います。ご質問では、アバーヤとチャーダルを一緒にして脱ぎ着をするかと聞いているようですが、脱ぎ着のしやすさ、しにくさが同じものなのか、違うものを一緒の質問で聞いてしまっているのか、どちらでしょう。

賀川　ありがとうございます。資料15のＤグループについての話だと思います。実はこの質問の仕方はいま申し上げたとおりではなくて、「この場面ではどのような服装をしますか」という聞き方をしていました。ですから、「このような場面でアバーヤを脱ぎますか」、「チャーダルを脱ぎますか」というよりは、たとえば「大学の中では何を着るか」、「大学の外では何を着るか」というかたちで記入してもらったものをまとめたものです。

たしかに公衆の面前でアバーヤを脱ぐことはできません。ですから大学の中で脱ぐときは、女性用のコモンルームみたいな部屋があって、そこで脱ぎます。脱いだ後のシャルワール・カミーズなどは皺になっているので、それをきちんと整えたりもします。それに対してチャーダルはパッと脱げるので、たしかにチャーダルのほうがかなり脱ぎやすい状況にあるかと思います。

酒井　チャーダルの下がどのような格好なのかも関係しますよね。これは基本的に脱いだら全部がシャルワール・カミーズになるんですか。

賀川　そうですね、基本的には。

酒井　ジーンズにＴシャツという人はいませんか。

賀川　Ｔシャツはあまり……。ジーンズはたしかに履くこともあります。下のズボンはタイトなものを履いたり、タイツのような、日本で言う10分丈のスパッツを履いていたりもします。Ｔシャツは、寮の中では着ている女性はいますが、すくなくとも私が調査した大学の中では見たことがないですね。

和崎　パルダについての言説の内面化の部分と、資料15で５グループの分類とで、どの語りをしている人がどのグループに属するか、対応関係はまとめていないのでしょうか。

賀川　すみません、それはありません。

和崎　なくてもいいと思いますが、たとえば「パルダは盾であり、羞恥心で……」と言っているのに、実践面では脱ぐ人だったらおもしろい。そういう自分が語っていることと行動とのずれみたいなものも資料で提示できていたら、より興味深い表現になると思います。

賀川　ありがとうございます。先ほど、①パルダを実践している人と、②部分的にしか実践していない人と、③実践していないと三つがあると申し上げましたが、実際に彼女たちの被服の方法を比べてみると一緒だったりします。一緒のような被服の方法だけれども、ある人の基準では「実践している」と言っているし、ある人の基準では「実践していない」と言っているという違いがある部分もおもしろいかと思います。

後藤絵美　細かいところですが、マウドゥーディーによるという法学者のコーランの解釈の部分につい

て質問です。もともとアラビア語のコーランの記述をパキスタンの文脈に落として訳したものを、さらに日本語に訳していて、私は日頃解釈や翻訳について研究しているので、おもしろいなと思って読みました。

そのなかで、24章、光り章の30節、31節のところに「まだ女性のパルダに関する知識を持たない男児以外に」とありますが、ここはアラビア語だと「アウラ」で「恥部」なんですね。「恥ずかしい部分に関する知識を持たない男児」という文脈ですが、これにパルダが入るのはおかしくないかなと思いました。これはもともとこういうものだったのかというのが一つ目の質問です。

もう一つ、33章59節に「自分の上にチャーダルの面被をかぶるようにしなさい」とあります。これはおそらく今回の報告に関わってくると思いますが、これはウルドゥー語でこのような意味で出てくるということなんですよね。

賀川　ありがとうございます。まさにここに関してのコメントをいただきたくて今回持ってきたところが大きいのです。パルダに関する知識の部分は、ウルドゥー語のマウドゥーディーが訳した原文では「パルダ」となっていて、そのまま訳してしまいました。ウルドゥー語では「サタル」というと恥部を意味することが多くて、そういう意味なのかなと考えたのですが、原文では「パルダ」で記されていました。

59節について、「チャーダルの面被をかぶるように」という部分ですが、マウドゥーディーがここを訳すときに「顔の覆いについて述べている」と主張していて、ここは身体全体のことも言っているかもしれませんが、とりあえずニカブは絶対にしなければいけないということを述べていたので、その部分に該当するのではないかと考えます。

報告２

「伝統」を超えて

現代トルクメン女性と民族衣装コイネック

岡田 晃枝　　東京大学大学院総合文化研究科

私はトルクメニスタンの女性の装いについてお話しします。トルクメニスタンは、初代大統領が個人崇拝の体制をつくりあげ、国中に大統領の金ぴかの銅像や肖像画が飾ってあるということが欧米や日本のメディアで紹介された結果、非常に強い権威主義体制の国であると認識されるようになりました。中学生、高校生、大学生の女性がみんな同じ制服を着ているために、そうした装いが国家統制を厳しくしている証左のようなかたちで取り上げられることが多くあります。そのあたりが実際にどうなのかについてお話ししたいと思います。ただし、トルクメニスタンでは、賀川さんの研究のように、研究者が研究のためのデータを取るために、一般の人々に対してインタビューすることは制限されています。ですから私が話せるのはあくまでも自分が接触した人々の服装と、私が聞いても差し支えない範囲での話、また日本に留学した人、あるいは海外で出会ったトルクメン人からの聞き取りが主になっています。その点をご了承ください。かなりバイアスがかかった話になるかもしれませんが、あまり地域差もない気がしますので、それほどひどく無意味な発表ではないと思っています。

まず、トルクメニスタンという国をご存じない方が多いと思いますので、簡単に紹介します。この場は女性の考え方や規範などについて追究する研究会だと思いますので、トルクメニスタンにおける女性の地位について少しお話しします。そして、メインとなる伝統的な衣装、制服として導入されているコイネックがどんなもので、実際にそれを女性たちがどのように着用しているか、それが国民を管理する抑圧的統制のための手段なのか、それとも女性たちにとっては別の側面があるのか、そのあたりについて私見になりますがお話ししてまとめたいと思います。

1．トルクメニスタン概要

トルクメニスタンは中央アジアにあります。前回の研究会で帯谷知可先生がウズベキスタンのお話をしてくださいました。ウズベキスタンは、資料２－１の地図の濃い色で示した８か国の真ん中にあります。

資料２－１　中央アジア各国とトルクメニスタンの位置

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:The_Caucasus_and_Central_Asia_-_Political_Map.jpg から筆者作成

資料２－２　中央アジア諸国基本情報

国名	面積	人口	首都	大統領	民族構成	公用語（国語）	一人当たりGDP
トルクメニスタン	49.1万㎢	580万	アシガバット	グルバングリィ・ベルディムハメドフ（2007～）	トルクメン人85%、ウズベク人5%、ロシア人4%、その他	トルクメン語	6,642.5ドル
ウズベキスタン共和国	44.9万㎢	3,190万	タシケント	シャフカット・ミルジヨーェフ（2016～）	ウズベク人83.8%、タジク人4.8%、カザフ人2.5%、ロシア人2.3%、カラカルパック人2.2%、その他	ウズベク語	1,490.7ドル
カザフスタン共和国	272.4万㎢	1,820万	アスタナ	ヌルスルタン・ナザルバエフ（1991～）	カザフ人66.5%、ロシア人20.6%、ウズベク人3.1%、ウクライナ人1.6%、その他	ロシア語（カザフ語）	8,840.9ドル（IMF, 2017）
キルギス共和国	19.9万㎢	600万	ビシュケク	ソオロンバイ・ジェエンベコフ（2017～）	キルギス人72.8%、ウズベク人14.5%、ロシア人6.2%、ドゥンガン人1.1%、その他	ロシア語（キルギス語）	1,143.7ドル
タジキスタン共和国	14.3万㎢	890万	ドゥシャンベ	エマムアリ・ラフモン（1991～）	タジク人84.3%、ウズベク人12.2%、キルギス人0.8%、ロシア人0.5%、その他	タジク語	723.8ドル

データ出典……面積：各国政府／外務省Webサイト、人口：国連人口基金、民族：各国統計委員会（トルクメニスタンのみCIA The World Factbook）、GDP：IMF World Economic Outlook Database

カザフスタンの南がウズベキスタンです。トルクメニスタンはさらに南側にあります。カスピ海に面していて、アフガニスタンともかなり長く国境を接しています。また、トルクメニスタンの首都は山を越えるとすぐにイランに行ける地域にありますので、イランとのつながりもあります。

トルクメニスタンは、ウズベキスタンと同じようにソ連崩壊に伴って独立をしました。独立宣言は1991年10月です。実際にソ連が崩壊したのが12月31日なので、世界的に独立が認められたのは、1991年12月末です。天然ガスの埋蔵量が世界第４位という、すごくお金持ちに見える国です。実際のところ、トルクメニスタンの天然ガスに関しては、硫黄分が多くて、あまり高く売れません。脱硫装置を付けなくてはいけないわけです。脱硫装置で日本の商社、プラントメーカーがかなりテコ入れしていますが、掘ったら簡単に売れるという状況ではありません。埋蔵量も正確ではなく、実際のところ第６位だというデータもあります。

トルクメニスタンは永世中立国です。永世中立国というと、日本の若い人たちはスイスとオーストリアを頭に浮かべて、永世中立という概念と高度に発達した民主主義をつなげて考えることが多いですが、永世中立という国際法上のお約束事そのものは、民主主義とはそれほど関係がありません。民主主義であるほうが守りやすいことはあると思いますが、「よそが喧嘩をしているときには、そこに加わらない」、「自分の国は自分で守る」、「他国が喧嘩しそうなときには、できるだけ喧嘩にならないように努力する」といったルールを守っていることが重要です。

トルクメニスタンは、1995年に国連で認められて永世中立国になっています。国連総会できちんと認められた永世中立国は、世界の中でトルクメニスタンただ一つです。1995年に認められたあとに履行の確認もされて、直近では2015年に履行確認がなされて、現在もそれが続いています。

人口は約580万人です。そのうち85パーセントがトルクメン人です。

中央アジア全体が似たような国だと思われると困るので、資料２－２に中央アジア５か国の情報をまとめました。トルクメニスタンは人口580万ですが、ウズベキスタンはおよそ５倍の人口があります。面積はトルクメニスタンのほうが大きいにもかかわらず、人口はウズベキスタンに集中しています。１人当たりGDPを見ると５か国であまりにも違いすぎるので驚かれると思いますが、ウズベキスタンが1,500ドルを切るなか、トルクメニスタンは7,000ドルに近い数字です。一時期は7,000ドルを超えていましたが、天然ガスの価格が下がって、現在では6,642.5ドルという数字になっており、現在は多少上向いています。中央アジアでは、カザフスタンに次いで豊かな国と言えます。

あとで権威主義体制の話もしますが、いわゆるパトロン・クライアント関係で言うと、クライアントが多いと言えます。現在は有料制に移行しつつありますが、これまで長い間、国民全員が、ガス、水道、電気などを無料で享受してきました。基本的な食料品もかなり安く価格統制されているので、どんなに貧し

資料２－３　キプチャク・モスク
筆者撮影

くても生きていけるということがこの国を見る上で重要なのだと思います。貧富の差があることはあるのですが、貧しい人が明日をも知れない生活をする必要はない、そんな国です。

次に宗教の話です。イスラーム教のスンニ派の人たちが多いです。ただし非常に世俗的な人々です。お酒も普通に売っています。トルコ系のスーパーには、お手洗いの近くにお祈りをする場所がありましたが、１日５回のお祈りを昼間にはしない人がほとんどではないでしょうか。ラマダンも部分的にしかしない人が多いです。集会の自由がありませんので、金曜日のモスクに人が集まることがあまり推奨されないという側面もあります。

資料２－３は、首都アシガバットのすぐ近くにあるキプチャク・モスクという有名かつ大きなモスクです。このモスクの塔の各部分や入り口には、いくつかの文字が刻まれています。クルアーンから取った文字だと思われるかもしれませんが、実は違って、初代ニヤゾフ大統領が書いた『ルーフナーマ』という書物の一節が散りばめられています。この書物をトルクメニスタン政府は「クルアーンに並ぶ書物だ」といって出したので、国外のムスリム系団体からは強く批判されたこともあります。そういう独特の価値観を持った国だということができます。

国語はトルコ系のトルクメン語で、ロシア語も広く普及していますが、近年ではトルクメン語とロシア語のバイリンガルは減っています。一方で、英語を小さい頃から学び始める子どもが多いです。

先ほども言ったように、強い権威主義体制の国という評価が世界的になされています。Freedom House のレポートでは、最下位５、６か国の中に入れられていて、“Worst of the Worst”というタイトルが付けられている国ではあります。

２．トルクメニスタンにおける女性の地位

トルクメニスタンにおける女性の地位ですが、私がさまざまな大学で学生や研究者に会ったりするなかでは、彼らは「トルクメニスタンは女性をとても大事にしている国である」と口々に言います。トルクメニスタンに関してはジェンダーの問題は非常に小さいというのが彼らの言い分です。

確かに伝統的なトルクメン人社会に存在していた強い家父長制度は徐々に弱まってきていると言えます。女性が自分で仕事を始めたり、お父さんとお母さんが両方働いているのはソ連の時代でも当たり前のことでしたが、おじいさんがすべてをコントロールするといった強い封建的な制度は徐々に弱体化していて、首都ではそれはほぼないと現地の大学生たちには言われました。ただし、家事・育児は女性の仕事だという考え方は強固ですので、ソ連時代のソ連の女たちと同じく、女性の社会進出が奨励される一方で、家でも女性がほとんど働く。女性が24時間働いていて、男性よりもよほど働かなければいけないという負担が押し付けられている状況ではあります。

新しく誕生した国ですので、人口を増やしたいということもあって、多くの子どもを出産した女性には、国から褒賞が出ます。８人子どもを産んだら、産んだ女性は家がもらえます。現地に行ったときに、飾り付けられた家の前できれいな服を着た人がニコニコしている光景を何度か見たことがあります。「これはたくさん子どもを産んだ女性に対するプレゼントだよ」と説明を受けました。人口を増やすのに貢献した女性には、国からきちんと褒賞があるということです。

その一方で、国家公務員として重要な職で働く女性たち、アーティスト、実業家など、国家に貢献した女性への評価も高いです。資料２－４は国際女性デーのイベントの様子です。2018年に、３月８日の国際女性デーを挟んで、私が所属する東京大学の授業として学生を連れてトルクメニスタンに行きました。これは３月７日に行われた、子どもをたくさん産んだ女性を中心として、とくに貢献のあったお母さんたちを招いてのイベントです。外務省の偉い人たちがあいさつしていたので、政府が主催したものだ

資料２－４　国際女性デーでのイベント
筆者撮影

資料２－５　国際女性デーのパーティー
筆者撮影

と思われますが、こうしたイベントが行われています。有名な歌手が歌を歌ったり、コメディアンが出てきてコントをして会場がドッと湧いたり、貢献した女性たちに政府が楽しい時間をプレゼントするということがされていました。

資料２－５の大きなスクリーンに映っているのはベルディムハメドフ現大統領です。大統領が歌っている映像が流れて、それに合わせてみんなが踊るというシーンが見られる興味深いイベントでしたが、これは大統領が主催した国際女性デーのパーティーで、３月８日に行われたものです。この政府主催のパーティーでは、閣僚や議会の議員、国家公務員として省庁で働く人たち、各国の大使夫人、女優、歌手などの女性たちが招待されて集まっていました。

トルクメニスタン政府のご厚意で、私たち（ただし女性のみ）もそこに参加させていただきました。学生たちは動画などで見たことのある女優さんや歌手の人がいると大喜びしていました。

子どもをたくさん産むという家庭内で活躍をした人と、家庭の外で活躍した人との両方がきちんと評価されているところに、トルクメニスタンの女性の地位を考える興味深いポイントがあるのではないかと思います。

女性の実業家も増えています。私も何人かに会って、インタビューはできませんから、たまたま親しくなった方々にいろいろ話を聞いてきました。また、社会起業家としてリーダーシップを果たしている女性も増えています。活動に定評のある人たちもいます。

女性議員の数は４分の１を超えています。日本の国会の女性議員が13.7パーセントであることに比べると、議会に占める女性の割合は二倍近いです。現在の国会の議長も女性です。閣僚にも女性が何人も入っています。

トルクメニスタンの大学は、一部の私立学校を除いて、学校はほぼすべて無料で教育が行われます。大学に至っては奨学金をもらえますので、大学に通えば給料がもらえるという状況です。そのなかで、３年ほど前に、授業料を学生が支払うタイプの国立大学が初めてできました。そこでは教育をすべて英語で行っています。「国際人文発展大学」という少し変わった名前ですが、経済学や国際関係学、文化、地域研究も学ぶような、人文・社会科学系の学問をメインとする大学です。英語で教育をしていますし、大統領の肝煎りで設立されたので、入学がものすごく難しいところですが、そこに占める女子学生の割合は60パーセント、半分以上が女子学生なのだそうです。

また１年半前、筑波大学がかなり協力して、工科大学を現地につくりました。割合を正確には聞けていないので漠然とした話ですが、関係者によると、理系の大学なので男子の入学者の方が圧倒的に多いだろうと思ったら、そこも英語で教育をするということで、ふたを開けてみたら関係者の予想を裏切るほど女性の入学者が多かったということです。

猫も杓子も大学に行くような国であれば、それもありえるという気もします。しかし、中等教育まではほぼ100パーセントが受けますが、高等教育に関しては、トルクメニスタンでは８パーセントを切る進学率しかありません。ごく一部の人たちが大学に行くわけです。その状況で文系のトップの大学で半分以上が女子学生というのは、かなり興味深いケースではないかと思います。その大学を卒業した女性たちは、もちろん社会で働く人もいますし、そのまま海

資料２－６　伝統的な衣装
Lachyn (Official Inflight Magazine of Turkmenistan Airlines) Issue 16, 2017.5, p.14 から引用

資料２－７　現代のコイネック（中学生）
筆者撮影

資料２－８　現代のコイネック（大学生）
筆者撮影

外に留学する人もいます。

３．トルクメニスタンの女性の民族衣装

続いて女性の民族衣装の話です。今回の報告で中心とするのは、コイネックというものです。説明書きではチュニックと書かれていますが、最近のトルクメン人の女の子たちは、基本的に「トルクメンのドレス」と言っています。

丈が長くて、踝あるいはそれ以上の丈があります。ケテニと呼ばれるシルク生地で作られているものが多いですが、近年では木綿のもの、ポリエステルの入ったベロアの生地も見られます。その下にはぴったりとしたパンツを履きます。賀川さんがお話しされていたドレスの下に着用するパンツとは、かなり形が違うと思います。

遊牧民族で、もともと馬に乗る人たちでしたので、股の部分が広くなっています。裾は狭くなっていて、ぴったり足に合うようになっています。これも遊牧民族に特有で、虫が入ってこないなど自衛のためにこのようなスタイルになっています。これが基本的な形ですが、最近の女の子たちはこのパンツではなく、丈の長いキュロット型のペチコートを履いている人が多いようです。そのような便利なものも出てきました。その上にはチャビットという上着を着て、タヒヤという丸い帽子をかぶります。

古来の衣装は資料２－６のようなもので、19世紀ぐらいまでの女性たちは、何かイベントがあるときは、このような衣装を着ていました。この写真の衣装は花嫁用のものなので、アクセサリーがたくさんついてきらびやかです。この上にかぶる衣被（きぬかずき）のようなものは、女性の地位、子どもを産んだのか産んでいないのか、どれぐらいの年齢なのかなどによって色が違ったり、トルクメンの各民族によっても好まれる色があったようです。

アクセサリーは各民族の代表的な文様が施されています。アクセサリーの一部は、日本のポーラ研究所が1993年に入国して買ってきて所蔵していますので、ポーラ美術館でたまに展示があります。これが古いタイプのトルクメン人の衣装、ハレの日に着るための衣装だと思ってください。

実際に現在着られているコイネックは、資料２－７のような感じです。これは中学生の女の子たちです。資料２－８が大学生の衣装ですが、最近の人たちはこのような服を着ています。

資料２－９は、コイネックを仕立てるお店です。壁の上のほうに掛かっているのが生地です。生地もさまざまな色がありますし、いろいろな布地のタイプがあります。奥のほうに掛かっている栓抜きのような形のものが、コイネックの襟の部分です。襟の部

資料２－９　コイネック制作を請け負う店舗
筆者撮影

分、刺繍の部分だけが独立して売られていて、自分で生地に合わせて好きな襟の形、好きな刺繍を選んで縫い付けてもらいます。その刺繍に合わせて胸の開き具合も調整します。基本的に丸襟ですが、浅い襟もあったり、深い襟もあったりします。刺繍の部分が特徴を出しやすい部分ですので、みんなかなり慎重に選びます。

お店でミシンをかけている人たちがいますが、この人たちは刺繍をしながら襟の部分を作っています。私が作ったコイネックの生地は、国際女性デーの大統領主催のパーティーのときのおみやげ一式に入っていたので値段がわかりませんが、襟は日本円に換算して1,000～1,500円ぐらいのものが多かったと思います。

どのように作るかというと、既製品もありますが、ほとんどの女性は生地をまず選んで、それに合わせて襟周りの刺繍を選びます。それを合わせて縫製を請け負う業者に持っていって、自分の体に合わせて採寸してもらいます。襟ぐりをどうするか、袖の部分を膨らませるのか、ぴったりにするのか、袖丈をどうするのか、ウエストをシェイプするのか、ゆったりにするのか、どんなヒールの靴を履いて、どれぐらいの丈にするのか。そのようなことを個別に打ち合わせをして作ってもらいます。そのコイネックに合わせる靴を決めて、そのヒールの高さを加味したドレス丈で注文するという点もポイントです。

仕立て代は3,000～5,000円ぐらいです。ただし、為替レートが実勢を必ずしも反映しないかたちでコントロールされていると言われておりまして、おそらく実勢価格としてはその３分の１くらいではないかと思われます。そうなると襟が相当高いという印象がありますが、それぐらいの値段で女の子たちはコイネックを手に入れます。

もちろん自宅にミシンがあって、自宅で縫う人たちも若干います。JUKI製のミシンがすごく人気で、日本企業のなかで意外なことにトヨタに次いでJUKIが有名です。「襟の刺繍も自分でできる」と言っていて、実際に向こうの学生さんたちが、「こんなふうに刺繍するんだよ」と刺繍のやり方を見せてくれました。趣味と実益を兼ねて自分で刺繍する女性もいます。

自分の体に合わせて、自分の好みに合わせて作ってもらうことができるので、デザインに関しては、決まった形も、「こうでなければいけない」というものがあるわけではなく、それは時代によって、人々の好みによってかなり変化します。このあたりがポイントではないかと思います。これについてはまたあとでお話しします。

４. 制服としてのコイネック

次に、コイネックがなぜ制服になったか、どのように制服になったか、どのように着用されているかについて、お話ししたいと思います。初等・中等教育に関していうと、子どもたちのほとんどが中等教育までは受ける国です。ですから、まずは初等・中等教育にコイネックの制服が入ります。

独立後あまり時間を置かずに、初等・中等教育における制服にコイネックが指定されました。それは緑色のドレスです。トルクメニスタンの国旗が緑色ですが、そのナショナル・カラーの緑を使ったものです（資料２－10）。少し光沢のある生地です。この写真では夏まだ暑い時期だったので１枚で着ていますが、冬になるとその上に丈の長い上着（チャビット）を羽織ります。帽子は、先ほど見せたのと同じものをかぶっているのがわかると思います。パキスタンの例とはまったく違って、子どもたちは太陽に存分に顔をさらしています。もちろん日焼けを嫌って帽子をかぶっている子はいますが、顔を隠すという文化は、トルクメニスタンにはほとんどありません。

資料２－11の子たちはみんな緑の生地のドレスを着ていますが、襟の部分の刺繍がいろいろ違うのがおわかりになるでしょうか。伝統的な模様として似たようなものもありますが、違う襟のものを選んでいます。右下の子は前立ての部分が短いですが、この

資料２－10　コイネックを制服として着る中学生
筆者撮影

ようにいろいろなデザインの襟ぐりをしています。

一方、大学でのコイネックは、それよりもかなり遅い時期に導入されました。初代大統領が2006年12月に亡くなって、その後選挙を行って2007年２月から現在の大統領が執務をしていますが、現在の大統領になってから、大学生もコイネックを着用するように義務付けられました。

当時は学校ごとに色が違って、青に白いチョッキを着ている学生、黄色い服を着ている学生など、学校ごとにスクールカラーがあって色とりどりでした。５年ぐらい前になって、すべての大学で赤色を着用させるようにという指令が、政府から出されました。赤もトルクメニスタンのナショナルカラーで、絨毯の色です。

現在は、緑の制服を着ているのが小中高生、赤の制服を着ているのは大学生だと、みんな認識するようになっています。ただし、一般の人たちも赤色の服をよく着ますので、赤を着ているからみんな大学生というわけではありませんが、若い子が赤いコイネックを着ていれば大学生だろうと目星を付けても、あまり間違いではないかもしれません。

細かい部分に関しては、大学ごとに指定要素を加えることができるそうです。私が行ったいくつかの大学では、みんな似たような生地の服を着ていました。色味もほとんど同じだったと思います。学校ごとに少し暗い赤、明るい赤もありましたが、あまり変わりはなかったと思います。ほとんどの大学で、ベロア地の生地を使っていたように記憶しています。

学生だけではなく、実は学校で働く教職員もコイネックを着用することになっています。「これを着なくちゃいけないのよ」と女性の先生たちが言っていましたが、コイネックを着ることが面倒くさいわけではないようです。いろいろな服から選ぶのではなく、コイネックのシリーズから服を選ばなければならないのが少し不自由だと言っている人はいました。

テレビ局のキャスターを含む一部の公務員も、着用を義務付けられています。教育省などは、コイネックを着ていかなければいけないそうです。一方で外務省の人たちは、仕事柄、外国の要人に会うこともありますし、必ずしもコイネックでなければいけないわけではないと言っていました。このあたりは細かいルールがあるようですが、外から見える明文化された資料が手に入らないので話を聞いただけですが、職場によってはコイネックを着ていかなければいけないところもあり、そういう規定がないところもあるようです。ですから、国全体、どの職業の人も、どの女性の人も、全員がこの服を着なければいけないわけではありません。典型的な例では、国連のローカルスタッフは誰もコイネックを着ておらず、全員、普通のヨーロッパでよく見られるタイプの服装をしていました。

現地の大学生が、トルクメニスタンの文化について語ってくれましたが、日本の女の子たちが着物について語るときに、まったくわからないところがたくさんあるのと同じように、彼女たちも必ずしもすべてを知っているわけではないというところもあります。教室の中の風景は、資料２－11のような感じです。黒い服を着ているのは私が連れていった学生

資料２－11　大学の教室での様子
筆者撮影

です。女の子も男の子も同じ教室で一緒に学ぶし、議論をするという学校です。

結婚していない学生さんは、タヒヤという帽子をかぶります。結婚した女性は、資料２－４のように、みんなスカーフをかぶることになります。スカーフの巻き方がとても特徴的です。大判のスカーフを３枚ぐらい使って、このような四角いかっちりしたシルエットを作るそうです。しかし最近の人たちはそれほど上手にかぶれないので、バケツのような型があって、それをかぶって上からスカーフを巻くという便利グッズも現在は出ています。

結婚している人は、学生であってもスカーフを巻いています。いくつかの大学では在学中に結婚した子たちがいて、その子たちも同じ教室にいますが、スカーフを巻いて授業を受けていました。長老に近いおばあちゃんになってくると、このような巻き方ではなく、頭に沿った巻き方で、なおかつ長く裾まで垂らす、そんな巻き方になります。かつては民族によって巻き方が違ったり、スカーフの色が違うと言われていましたが、現在は民族による統制はないそうで、自分に似合う色を選んでいると言っていました。

５．制服としてのコイネックの背景

先ほど、コイネックを制服とするのは国民を統制するためではないかという議論が時々あるというお話をしましたが、その背景として、独立後の国民統合という急務があったことが大きいです。同じ中央アジアのタジキスタンでは、1992年から内戦が起こっていました。高い山に隔てられた各地域でそれぞれコミュニティが発展したタジキスタンでは、ソ連時代に優遇されたコミュニティと冷遇されたコミュニティがあって、新しい時代になったときに、いったい誰が政権を動かすのかが原因になって内戦が起こっていました。つまり地縁のグループで対立が起こった内戦です。またカスピ海の対岸では、アゼルバイジャンとアルメニアが、ナゴルノ・カラバフをめぐって大きな殺し合いをしています。さらにロシアもチェチェン問題を抱えていました。

そうしたなかで、国民が分断されるような制度ではなく、国民全員がトルクメン人として国を盛り立てていけるようなシステムはどんなものかを考えて、民族ごとに分断されたコミュニティではなく、トルクメン人全体を指すような文化をつくり上げるということがなされました。

南にはアフガニスタンがありますし、トルクメニスタンとしては、統一的なトルクメン文化を創出して国民統合を急ぎ、分裂しない国をつくりたいという状況でしたので、それが一番大きな背景で、国民全体を包括するような文化政策の一つとして制服を導入したということができます。

６．強制か選択か

制服がコイネックとして導入されたことに対して、「自由を奪う」とか「高い生地なので貧しい国民に経済的負担を強いる」として、いくつかの人権系のメディアや女性運動の欧米のメディアが批判している記事を見たことがあります。しかし実際問題として、登下校と学校にいる間だけの着用ですし、それ以外の部分では、コイネックを着ようが、別の服を着ようがかまいません。ものすごく体を露出していたら「あの子は……」と言われますが、どのような服を着ようがそれほど問題が起こることはありません。

大学の制服指定が行われたのが2000年代後半と言いましたが、それまで女の子たちは、大学には自由に服装を選んで着て行っていました。みんなが洋装だったのに政府がコイネックを強制したのかというとそうではなくて、洋装している子たちと、コイネックを着ている子たちが普通に混在していました。コイネックを日常着としている女性も、それなりの数がいたということです。コイネックだと毎日違う服を着ていく必要はありませんが、洋装の場合は毎日同じ服を着ていくと目立つので服をたくさん買わなくてはいけないために、コイネックのほうがお金がかからないと言う人たちもいました。特定の子たち

資料２－12　ピクニックでの服装
筆者撮影

資料２－13　夜の外出時の服装
筆者撮影

資料２－14　ウェディングドレス
筆者撮影

がコイネックを着て、特定の子たちが洋装をしていたわけではなく、同じ人が「今日はこっちにしよう」ということで、洋装もコイネックも併用する学生がかなりたくさんいたそうです。

現地に滞在していたときに、うちの学生とトルクメンの大学生たちが一緒にピクニックに行きました(資料２−12)。左端は日本人の学生で、その隣に４人がトルクメンの女の子たちが並んでいます。そのうち３人はコイネックを着ていますが、１人はブラウスにジーンズという格好です。このように学校から離れたところで何かをする際には自由に服装を選んで、コイネックを着たければ着てくるし、そうでなければ軽い服装をしてきます。資料２−13の左側は日本人の学生で、右側がトルクメン人の女の子です。昼間はコイネックを着ていますが、「夜、一緒に遊びに行こう」と言うと、出てくるときにはこういう洋装を着てきました。

賀川さんの報告で、誰も買わないパキスタンのショッピングモールの素敵なドレスがありましたが、トルクメニスタンの場合は、ウェディングドレスとして資料２−14のようなものを着る人たちもいます。

コイネックであることと、色を統一したことによって民族ごとの特徴が薄れたことは大きかったのではないかと考えます。それによって民族を超えたスタイルが誕生しています。民族ごとの特徴がどんどんなくなってきて、みんなが同じような流行を追うようになってきました。政府から強制されたというよりも、若い女性たちが、政策のなかで一種の自分たちのスタイルを生み出すことにつながっています。

最初は伝統的なゆったりとしたスタイルでしたが、2000年前後は日本で1990年代に流行したボディコンのようなピタピタなコイネックを着て、みんな学校に行っていたそうです。現在は、再びゆったりとしたスタイルに移りつつあります。それを牽引しているのは政府ではなく、ファッションリーダーとなるおしゃれな若い女の子たちです。さらにその人たちにはフォロワーがついていて、特にインスタグラムでの情報発信や収集が積極的に行われています。

資料２−15　コイネックの新たなスタイルの模索と展開
SAHRA SAHINファッション・ショーの動画〈https://www.youtube.com/watch?time_continue=10&v=-B4YMFGH6IA〉から引用

資料２−15は有名なファッションデザイナーのショーの様子です。若い女の子が自分のブランドを立ち上げて活躍しています。見ていただくとわかるように、コイネックは前立ての部分に刺繍が入っている長いドレスですが、必ずしもそれにとらわれずに、長いドレスで、さまざまな形のものが出てきていると言えると思います。ただし、丈が長いという点は共通しています。

伝統への回帰でもなく、古臭いしきたりを政府が押し付けたわけでもなく、伝統を活かした新しい女性のスタイルの模索がいま行われています。それを活かした事業の創出が、若い女の子たちを積極的に動かしていると言うことができると思います。ソ連時代にソ連タイプの洋装が入ってきて、民族服がどんどん廃れていきましたが、民族の服装が選択肢の一つとして残ったという見方もできると思います。さらに、新しい情報収集や発信の手段を若い女性たちが開拓することによって、コイネックは社会を刺激のある方向に動かしていくきっかけにもなっています。

■質疑応答

和崎聖日（司会）　なかなか聞くことができない現代トルクメニスタンの、とりわけコイネックに注目した貴重なご報告をありがとうございました。事実関係などについて、何か質問がありましたらいかがでしょうか。

森理恵　男子は制服はありますか。

岡田晃枝　これは中央アジアでほとんど共通ですが、男子は黒いジャケットに黒い細いネクタイ、黒いパンツといういわゆるスーツ姿です。それが制服というか標準服のような扱いで、それ以外のものを着てくる子はいないです。それにこの帽子をかぶってきます。

森　中学校などもそうですか。

岡田　はい。

森　小学校は……。

岡田　小学生もみんなそんな感じです。

帯谷知可　小学生もネクタイを締めるんですか。

岡田　ネクタイは中学生からだと思います。ウズベキスタンはどうですか。

帯谷　制服というより、ゆるやかなルールとして、無地のシャツにズボンですね── 中学生にネクタイはどうですかね……。大学生はネクタイが必要なんですよね。

岡田　大学生はしていますね。高校生はトルクメニスタンもしているはずですが、小学生はしていないかもしれません。

帯谷　男子は黒っぽいズボンに無地のシャツが標準ですね。

岡田　カッターシャツですね。

帯谷　みなさんお店で買うんですよね。

森　既製服で、洋服なんですよね。民族的な要素はないんですね。

岡田　洋服です。民族服ではありません。

帯谷　以前にインターネットで、トルクメニスタン国民はすべて、ロシア人などであってもコイネックを着なくてはいけないと読んだことがあるのですが、そうなのでしょうか。

岡田　制服とか、職場で決まっている場合には着ますが、普通に日常生活をする場面では、彼らは自分で好きな服を選んでいますので、それが日常のすべてを縛っているわけでは、まったくないです。学校に行くには校則を守らなければいけません。それは留学

生であってもそうです。日本人の先生たちも向こうにいますが、日本人の先生たちもコイネックを作って学校に行っています。

後藤絵美　連れていかれた日本人の学生さんたちは、なぜリクルートスーツみたいな恰好をしているのでしょうか。何かむこうに行くための規範があったのかと思ったのですが、どうですか。(笑)

岡田晃枝　学校の写真を見ていただくとわかるように、学生たちがみんな民族服などのきちんとした服を着ているのに、日本人の子がTシャツや短パンで行くと浮いてしまうので、「表敬訪問用にスーツを持ってきなさい」と言ったら、彼らは「みんなに合わせる」と言って、それを着て学校に行きました。国際女性デーの大統領主催パーティーについては、招待されるとわかったのは現地に着いてからでした。そのため、日本からパーティー用の服を持参するようにという指示を学生たちにはしておらず、パーティーにはさすがにカジュアルな服では行けませんので、みんなスーツで行ってしまいました。(笑)

報告３

近代日本の国家主義・帝国主義とキモノ

森 理恵　　日本女子大学家政学部

日本研究の方はあまりいらっしゃらないと思いますので、まず初めに、キモノに関する研究動向を少しご紹介して、その後、「近代日本の国家主義・帝国主義とキモノ」という本題を述べたいと思います。はっきりとした結論にたどり着かず、思いつきを並べたようなことになってしまうかもしれませんが、お許しください。

１．着物の研究動向

最初に研究動向について、私の語学能力の限界で集められたものだけですが、ご紹介します。

⑴英語文献、韓国語文献、日本語文献

キモノに関するまとまった形での英語の書籍というと、これまで長い間、Liza Dalbyという方の本しかありませんでした。この人は芸者研究――芸者が着ているキモノ、キモノを着ている人は芸者というようなスタンスで研究されていて、日本の研究者からすると疑問が多くありつつも、キモノに関するまとまった英語の本がなかったので、よくDalbyさんの本が引用されるという状態が続いていました。その後2014年に、Terry Satsuki Milhauptさんというアメリカの研究者の*Kimono: A Modern History*という本が出ました。私が見落としているものもあるかもしれませんが、これが初めての、キモノについての英語の本格的な研究書かと思います。タイトルには「Modern History」と入っていますが前近代もカバーしていて、キモノの生産、流通、消費、美術品としてのキモノまで、目配りよく研究された本であると思います。

学術的ではない部分も含まれているかもしれませんが、近年はキモノ・ブームで、2015年ごろから英語のキモノの本が多数出されています（資料３－１）。*KIMONO: The Art and Evolution of Japanese Fashion*は、ヴィクトリア＆アルバート博物館の学芸員のAnna Jacksonさん編集のコレクションの紹介で、美術品として鑑賞するキモノという視点です。Manami Okazakiさんの*Kimono Now*は現代のキモノの消費動向です。Sheila Cliffeさんの*The Social Life of Kimono: Japanese Fashion Past and Present*は歴史的な面もカバーしつつ、キモノが社会のなかでどのように位置づけられているかというもので、近年はいろいろ出ています。

現在、“Kimono Refashioned”という展覧会がアメリカを巡回しています。京都服飾文化研究財団とアメリカのサンフランシスコ・アジア美術館が組んでやっている展覧会です。こちらはキモノ展というよりは、キモノ的な日本のモチーフが、どうハイファッションの世界に取り入れられたかという内容です。

雑誌論文の世界ですと、ファッション研究では*Fashion Theory*が有名な雑誌かと思います（資料３－２）。2017年の論文は別の雑誌ですが、残りの三つは*Fashion Theory*に掲載されたもので、さまざまな視点でキモノがそれなりに研究されているかと思います。Stephanie Assmannさんの2008年の論文“Between Tradition and Innovation: The Invention of the Kimono in Japanese Consumer Culture”（*Fashion*

資料３－１　キモノに関する研究動向①英語文献

書名	編著者	発行年	出版社
Kimono	Liza Dalby	2001	Vintage
Kimono: A Modern History	Terry Satsuki Milhaupt	2014	Reaktion Books
KIMONO: The Art and Evolution of Japanese Fashion	Anna Jackson	2015	Thames & Hudson
Kimono Now	Manami Okazaki	2015	Prestel
The Social Life of Kimono: Japanese Fashion Past and Present	Sheila Cliffe	2017	Bloomsbury USA Academic

資料３－２　キモノに関する研究動向②英語雑誌論文

タイトル	著者	発行年	掲載誌
Between Tradition and Innovation: The Invention of the Kimono in Japanese Consumer Culture	Stephanie Assmann	2008	*Fashion Theory* 12 (3)
Was Fashion a European Invention?: The Kimono and Economic Development in Japan	Penelope Francks	2015	*Fashion Theory* 19 (3)
Dillute to Taste: Kimonos for the British Market at the Beginning of the twentieth Century	Akiko Savas	2017	*International Journal of Fashion Studies* 4 (2)
Digital Kimono: Fast Fashion, Slow Fashion?	Jenny Hall	2018	*Fashion Theory* 22 (3)

Theory 12(3)）は、きもの着付け学院と趣味で着物を着るサークルに入って参与観察をした、文化人類学的な研究です。Penelope Francksさんの2015年の論文 “Was Fashion a European Invention?: The Kimono and Economic Development in Japan”（*Fashion Theory* 19(3)）は、ファッション論としてキモノを取り上げています。Akiko Savasさんの2017年の論文 “Dillute to Taste: Kimonos for the British Market at the Beginning of the twentieth Century”（*International Journal of Fashion Studies* 4(2)）は、イギリスの市場におけるキモノということで、歴史研究的なものです。Jenny Hallさんの2018年の論文 “Digital Kimono: Fast Fashion, Slow Fashion?”（*Fashion Theory* 22(3)）は和装業界に焦点を当てた研究です。英語圏ではさまざまな視点から、キモノについて研究されています。

韓国語の論文は１件しか発見できていませんが、『大衆叙事研究』27号に掲載されたイ・ファジンさんの「キモノを着る女性――植民地末期のカルチュラル・クロスドレッシングの問題」（2012年）という論文があります。韓国の人が好むと好まざるとにかかわらずキモノを着るという状況が植民地期にあったわけですが、それについて論じたものです。女優さんや有名人などが、わざと政策的な理由でキモノを着せられた事例などを取り上げている論文です。この論文と私が後半で取り上げたいことは関連しています。

日本の状況を見ると、英語圏より日本のほうがあまり進んでいない印象です。日本のキモノ研究では、江戸時代のものが美術品として研究されていて、もちろん一般書はたくさん出ていますが、学術的に現代のキモノを取り上げた研究は、実は日本ではあまりなされていないという現状です。

雑誌論文ですと、卒業式などのレンタル衣装に着目した研究や、キモノの構造をもう少しこうすれば着やすいといった作り方の工夫のような論文など、いくつかはあります。しかし、まとまったかたちでの研究はそれほど盛んではないという現状です。

⑵なぜ今、キモノを着るのか？

次に、現代においてキモノを着るということについて考えます。ここにいるみなさんも洋服を着ていますし、わざわざキモノを着る人は少ないと思います。では、どういう場合に着るのか。コスプレなのか、あるいは先ほど話があったように、一種の制服なのかもしれません。たとえば卒業式に、みんながキモノに袴を着ているなかに洋服で行くのはかなり勇気がいります。「面倒くさいな」と言っていて、聞いてみると必ずしも袴をすごく着たいわけではない学生さんもいますが、「この格好以外で卒業式に行くのが無理」という状況です。「はれのひ」問題もありましたが、振袖がないと成人式に行けないということでした。べつに洋服で行けばいいのですが、行けない。これは一種の規範というか、何でしょうか。また、超党派の和装振興議員連盟というものもあります。こうした現状があります。

さらに、「きものde銀座」という毎月第何何曜日の何時にキモノを着て銀座に集まりましょうみたいな同好会もあるそうです。誰でも参加できるらしいですが、このような活動もあるのが現在のキモノの状況かと思います。

私はかつて、卒業式や成人式などの特別な機会ではないときにキモノを着る人に、「なぜキモノを着るのか」についてインタビューしたことがあります。それほどたくさんの人にはインタビューできませんでしたが、これにはいくつか理由がありました。私が興味深いと思った理由の一つとして、「洋服中心社会のおしゃれ競争に疲れてしまって、そこから降りたい」というときに、キモノで新たな活路を見出すという答えがありました。キモノがそういう役割を果たす場合もあることがわかりました。もちろん全員で

はなく、ナショナリズムの発露として着ている人もいたのですが、それとは関係なく、現在の社会の規範から逃れる手段と捉えている人もいて、そこは少しおもしろいかなと思いました。

上海の写真館で、結婚記念写真を撮るときに、洋服も選べますが、キモノも選べるというサービスをしているところがあります。さらには京都に行って記念写真を撮ることもできますということです。中国に限りませんが、日本ではないところでこうしたサービスも現在では多いようです。

2. 近代日本の国家主義・帝国主義とキモノ

ここからメインのテーマについてお話しします。

(1)「キモノ」という用語の変遷 ── キモノの女性化・日本化

まず言葉の面で「キモノ」という言葉自体について考えてみます。もともと「着るもの」という意味なので、わりと近年まで、「着物」といったときには洋服も含めた着るもの全体を指すという言葉遣いをしていたと思います。それが20世紀の間にだんだん「和服」の意味に変わっていきます。現在では、あまり「着るもの全般」の意味で「着物」という言葉を使わないと思いますが、少し前までは「着物を着替えてきなさい」と言ったら、それは「和服を着る」という意味ではなく、単に「パジャマを服に替えなさい」というような意味であったりしたと思います。

それが変わっていったのは、外国語の「キモノ」の逆輸入ではないかと私は考えています。西洋から見たときに、日本で着るもののことを「キモノ」と言っているので、日本の民族衣装、日本で着られているものが「キモノ」だということになって、その言葉が逆輸入されて和服の意味になったのではないかと思います。

ポイントとしては、その逆輸入されるときに、西洋におけるキモノのイメージがくっついて逆輸入されて現在の日本のキモノになっているということです。そこで女性化と日本化が起こっているのではないかというのが、私の考えです。

たとえば「チマ」という韓国語があります。韓国語では「チマ」はスカート全般の意味ですが、日本語でカタカナで「チマ」というと、ハンボク（韓服）の中のスカート状の服を指しますね。日本語で「チマ」といったときには、洋服のスカートは指さない。それと同じようなことで、外国語で「Kimono」といったら、服一般のことは指さないと思いますが、日本語では服一般を指していた。ですから「チマ」と同じかたちだと思います。

日本語の「着物」はもともとは着るもの全体の意味なので、もちろん女性でも男性でもみんな着ていたわけですが、先ほど出てきたような芸者イメージのようなところで、女性のほうにぐっと偏ります。さらに、日本のものですから当然日本化があって、そのため「キモノは女性が着るものであり、日本を表すものである」という女性化と日本化が、キモノという言葉が和服の意味で日本語に定着するときに起こったのではないか。それは意外と20世紀半ば、いわゆる大日本帝国下、総動員体制期以降ごろに起こったのではないかと考えております。

「きもの」という言葉が洋服の意味でも使われている例は、探せばたくさんあります。たとえば中原淳一の『きものノ絵本』です。ひらがなで「きもの」と書いたときに洋服を意味する例はたくさんあります。逆に、『美しいキモノ』という雑誌が現在でもありますが、カタカナで「キモノ」と書いたときには和服を意味することも多いです。そのあたりも外来語だった痕跡を残しているのではないかと考えています。

(2)写真と文学からみる大日本帝国下のキモノ

続いて、大日本帝国下のキモノについて、写真と文学から見てみたいと思います。大日本帝国下はいろいろあって、もちろんこれだけではありませんが、私の集められた範囲で、台湾と朝鮮と東南アジアという順番で見てまいります。

●台湾

1910年代に、台湾の中国系の中・上流階級の人がキモノを着て記念写真を撮っている例があります。結婚記念写真や、人名録用の顔写真にキモノを着て写っているという例が見られます。もちろん常日頃そのような格好をされていたわけではありませんが、記念写真的な場合にキモノを着られている例があります。Joseph R. Allenさんが “Picturing Gentlemen: Japanese Portrait Photography in Colonial Taiwan”（*The Journal of Asian Studies* 73(4): 2014）という論文で紹介されています。

また洪郁如さんの論文「植民地台湾の「モダン

資料３－３　1944年に台湾の先住民の村のようすとして紹介された写真

『大東亜戦争と台湾青年――写真報道』朝日新聞社、1944年、53ページより引用

ガール」現象とファッションの政治化」（伊藤るり他編『モダンガールと植民地的近代』岩波書店、2009年）では、台湾の陳進という女性画家が日本の帝展で入選したときの新聞記事にキモノを着て写っている例が載っています。ですから台湾の知識階級、中・上流階級の人たちは、いつもではありませんが、日本と関係するような場面とか、社交着というのでしょうか、そのような位置付けでキモノを着ることがありました。陳進さんが描いた絵はキモノを着ている女性ではなく、中国の伝統的な衣装を着て楽器を弾いている絵で入選しています。

洪郁如さんの同じ論文では、1937年頃の皇民化運動期に、知識階級ではなく一般女性がコスプレとしてキモノを着て写真館で記念撮影をした例が載っています。コスプレをしている台湾の一般女性の例です。

1944年に朝日新聞社から出された『大東亜戦争と台湾青年』というグラフ誌のなかの写真が『台湾女性史入門』（人文書院、2008年）に取り上げられています。それを見ると、台湾人海軍志願兵の母親は中国風の服装をしていて、足は下駄を履いています。妻はキモノにモンペに足袋に草履というスタイルでグラフ誌に撮られています。

さらに『大東亜戦争と台湾青年』には、台湾の先住民族の村を訪ねたというページがあります（資料３－３）。それを見ると、どこまでやらせなのかわかりませんが、洗濯をしている場面など、浴衣のような、キモノのようなものを、女性や子どもが着ています。足ははだしです。また機織りをしている写真では、機織りをしている人は浴衣のようなものを着ています。一緒に写っている子どものうち一人は中国風の服装をしていて、もう一人は中国風なのか洋服なのかよくわかりません。もう一人一緒に写っている男性は、私たちが今日想像するような、台湾先住民族の民族衣装を着ています。

同じページには、家の中で蓄音機でレコードを聞いている先住民族の方たちも写っています。日本式家屋で、ほとんどの方がキモノ・スタイルです。こうした服装が1944年のグラフ誌に台湾先住民族の姿として写されています。

これらをどう捉えるかということですが、さまざまな意味があります。現在の私たちがキモノというと、「日本の象徴」とか「ヤマト民族の民族衣装」であるという捉えられ方が多いかと思います。しかし、1910年代の台湾の例や、沖縄で着られたようなキモノというのは、日本の象徴というよりは、洋服まではいきませんが、「大日本帝国下における一種の近代服としてのキモノ」という側面があるように思います。もちろんそれだけではなく混ざり合っているとは思いますが、「日本のものだから着よう」というよりは、一種の近代服としてのキモノという側面もあったのではないかと考えています。

文学の例としては、呉濁流の『ポツダム科長』という作品があります。光複後に日本語で書かれて台湾で出版された有名な小説ですが、このなかにキモノのことも出てきます。主人公は女学生ですが、これは回想です。

> 学校では顔の洗い方から着物の着方まで習ってきたが、いざ和服を着けてみると自分でも変な気持がするのであった。しかも女学生仲間から、「あれごらん、あの人、改姓名よ。あんな着方、おかしいわね」と陰口を叩かれることもあった。
> (呉濁流『泥濘に生きる――苦悩する台湾の民　呉濁流選集 第2巻』社会思想社、1972年、189-190ページ)

ここでの女学生仲間というのは、日本人だと思います。非常にせめぎ合っている状態が見てとれるかと思います。

> 停仔脚をはじめ空地という空地はほとんど日本人の投げ売りの店で埋められていた。古いものばかりで新しいものはほとんど見当たらない。なかにはきれいな和服もあるにはあるが、彼女は今さらそれを見ようとしなかった。田舎から出てきた百姓たちは安い安いと言って屑物まで買っていった。
> (同、191ページ)

日本の敗戦後に日本人が引き揚げていく際にキモノを投げ売りしますが、この主人公は見る気にもならなかったということが書かれています。

> 薫英は玉蘭と同じカモメ会会員で、特別看護婦時代いっしょに香港へ派遣されたことがある。(中略)しかし、時代は彼女の心境を一変させた。毎朝神棚の前で祈り伏す彼女ではあったが、神棚が撤去されると共に孫中山先生の肖像を掲げて拝むようになった。それで彼女もいつのまにかモンペを棄てて美しい旗袍に着換え、いわゆる光復姿で日本兵のかわりにわが国の兵隊さんといっしょに歩くようになった。
> (同、202ページ)

これは軍国少女だったお友達が、光復後にモンペから旗袍(チーパオ)に着替えたという場面です。

●朝鮮

朝鮮では、1930年代後半に撮られた金鐘泰という男性画家の写真の例があります(資料3－4)。金惠信さんの『韓国近代美術研究――植民地期「朝鮮美術展覧会」にみる異文化支配と文化表象』(ブリュッケ、2005年)に掲載されています。写真に写っているうち、金鐘泰がモデルとした女性や描いた絵は韓服を着た

資料3－4　1930年代後半の画家・金鐘泰とモデル
『韓国近代美術研究――植民地期「朝鮮美術展覧会」にみる異文化支配と文化表象』ブリュッケ、2005年、116ページより引用

状態ですが、金鐘泰自身はキモノを着て写っています。これはこの人が親日派であったというわけではなく、留学生が大日本帝国下の日常着として着ていたキモノだと思います。

在日本大韓民国民団のグラフ誌に載っている1930年代後半や1940年の写真でも、総力戦下でキモノを着るように強制されたということもあるので複雑ではありますが、洋服や韓服、キモノが入り混じって着られている姿が見られます。分けることはできず、ごちゃごちゃ混ざり合っている姿ではないかと思います。

韓国の小説の例として、韓国近代小説の父とされる李光洙の『無情』があります。羅蕙錫（ナヘソク）をモデルにしたと言われる日本の音楽学校に留学しているビョンウクという女性が、かっこよく登場する場面があります。そのときにキモノを着ています。「ある日本服の若い婦人」というかたちで颯爽と登場する場面に、留学生だったということで日本服という表現が使われています。

次は崔曙海『二重』という短編小説です。この小説はなかなかいわくつきで、朝鮮語で発表しますが、検閲で削除されてしまいます。削除されて見られないはずが、総督府の資料の中に日本語訳が載っていたので、現在の私たちは日本語で読むことができるという非常に皮肉な結果になった短編小説です。

この小説は、京城の日本人町に主人公の一家が引っ越してきて、隣の日本人のおばあさんと一緒に妻がお風呂屋さんに行きます。すると「朝鮮人は入らせない」ということで差別を受けて、妻が泣いて帰ってきた。その続きです。この主人公は怒って、「自分は入ってみせる」と言って出ていきます。すると友人に出会います。

> ふと向うから浴衣掛けで風呂帰りの友人に出逢った。
>
> おい君は何処へ行くかと言われて、風呂へ行くのだ、今し方こんな目に逢わされて妻が泣いて帰って居るから、俺が仇討をする意味で入浴して見せる、もし二の句の三の句のと言ったら承知しない考なのだ。
>
> ああ、君、駄目だ駄目だヨボは風呂へ入れないよ、日本羽織に下駄を穿いて行けば入れるが、白衣の人は入れないよ。（後略）
>
> （『近代朝鮮文学日本語作品集（1901〜1938）創作篇１』緑蔭書房、2004年、202ページ）

白衣の人というのは、ご存じのように、朝鮮の人を象徴する使い方です。それに対して日本羽織や下駄、浴衣が対照されています。

張赫宙「追はれる人々」も紹介します。これは日本の農民と朝鮮の農民が対照されるかたちです。

> 村を去った者達の小作地は、それらの黒い着物を着た見慣れない農民達に依って耕された。頬かむりをして、青い股引をはいて、着物のお尻をめくって、立ち働いた。・・・・・・・・・・・。昌洞イ等が村を追はれたやうに、彼らも自分たちの故郷の土地を××××農民だった。
>
> 新来の農民とは全然交渉がなかった。そこの農民が殖える毎に白衣の農民が間島に流れた。
>
> （『近代朝鮮文学日本語作品集（1901〜1938）創作篇３』緑蔭書房、2004年、128ページ）

日本の農民は黒いキモノや頬かむり、青い股引、「キモノの尻をめくって」という記述が出てきますが、それに対して朝鮮の農民は、白衣の農民です。検閲があるので××になったり、書き方も「朝鮮の」とは書かないで、象徴的に「白衣の農民」というかたちになっています。そういうときに衣服が使われているということです。

次に金聖珉の「半島の藝術家たち」を紹介します。これも日本語小説で、すごくかっこいいモダンガールの女性が出てきますが、これは朝鮮人です。朝鮮人女性が酒場でかっこよくキメているというシーンに、断髪やキモノというものが出てきます。

> 酒場マロニエ――
>
> 暎姫はここへ来て、名前も日本風にツバキと改め、一躍クヰンになってしまった。
>
> （中略）「素晴らしい恰好ぢゃないか、新鮮な魅力が、湧いて来たね、浮気者はまたついうかうかと岡惚れでもしやうと云うもんさ、ははは」
>
> 場所柄、洋秀は歯切れのいい日本語をしゃべりながら、断髪に和服姿の暎姫を珍しそうに見上げ見下げした。
>
> （『近代朝鮮文学日本語作品集（1901〜1938）創作篇4』緑蔭書房、2004年、286ページ）

●東南アジア

東南アジアについては、『ジャワ・バル』（龍渓書舎、

資料３－５　『ジャワ・バル』の表紙

倉沢愛子解題　南方軍政関係史料８　『ジャワ・バル［復刻版］』より引用

1992年）を取り上げます。これはジャワ新聞社という朝日新聞社系列の新聞社が、1943年から1945年までジャワで発行していたグラフ誌です。最初はインドネシア語と日本語のバイリンガルでしたが、だんだんインドネシア語だけになっていきます。

『ジャワ・バル』にはいろいろな表紙がありますが、キモノが出ているものもあります。日本人女性がキモノを着て、現地の女性と遊んでいる写真や、ジャワの要人の娘さんや妻――スカルノの妻に東条英機の妻が贈ったキモノを着せている写真などが使われています。ジャワの人にキモノを着てもらって、日本の歌を歌ったり踊ったりするイベントを開いたという記事も掲載されています。

このような状況で、日本の象徴としてのキモノというものが色濃く出てきました。日中戦争～アジア太平洋戦争期、総動員期、1937年以降ぐらいから、だんだん日本の象徴としてのキモノというものが強まってきて、『ジャワ・バル』に至ってはっきり出たという気がしています。軍政下で、融和政策というか宣伝のために、キモノが日本を象徴する美しいものとして扱われていることがわかりやすく出ている例かと思います。

シンガポールで1943年に書かれた小山いと子「南方通信（昭南にて）」を紹介します。

> 着物を着て街を歩いてゐたら、「白昼日本の着物を着て歩いてはいけない。特殊の女とまちがへられるから、国辱である。」といふ意味の忠告を受けた。日本の女が日本の着物を着て日本の占領地帯を歩いてなぜいけないのであらうと考へて見たが解らない。（中略）傍をマレーの女はサロンを穿き、印度の女はゆるやかなサリを着け（中略）
>
> 日本の着物が美しく見えないことは天津や北京でも経験したことを思出した。
>
> （『日本婦人』1943年3月号、34ページ）

日本のキモノで歩いていて怒られたという場面です。これはご存じのとおり、東南アジアでキモノを着ている人といえば、からゆきさんだったわけです。19世紀の終わりから、東南アジアでキモノを着ていたのはからゆきさんなので、そのイメージが根強く残っていて、このような言説になって表れていたと考えられる、キモノのまた別の側面です。

まとめ

張小虹さんの『フェイクタイワン――偽りの台湾から偽りのグローバリゼーションへ』（東方書店、2017年）という興味深い本にも書いてありましたが、日中戦争以降、アジア太平洋戦争期の台湾で、中国風のボタンや襟はやめなさいと命令を出したり、日本風を強制していく時期がありました。そこでキモノの奨励、強制や、『ジャワ・バル』のような対外宣伝に使用される。それと裏表で、植民地文学のなかでは、もちろん日本批判の文脈で使用されます。また最後にご紹介したように、からゆきさんに代表されるような芸者イメージとしてのキモノというものも根強くある。規範というのかわかりませんが、さまざまなキモノの状態が時期とともに混じり合いながら少しずつ移っていく様相を見ることができるのではないかと思っています。

それをうまく理論化して、すっきりまとめられるところまではまだいっていません。思いつきのような段階ですが、これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

■質疑応答

和崎聖日（司会）　近代日本におけるキモノの展開、キモノを通してどのようなことが見えるかを考えた、たいへん興味深いご報告をどうもありがとうございました。それでは、事実関係等について、いかがでしょうか。

酒井啓子　台湾にしても朝鮮にしても、現地の人たちがキモノを着る際に、誰がどういうルートで売っていたのでしょうか。それとも、現地で作っていたのでしょうか。前者の場合は、日本から輸出、売っていたのでしょうか。というのは、庶民が手に入る金額ということになると、現地で作っていないと手に入らないですよね。

森理恵　羽二重などは朝鮮でも生産していますが、反物を輸出していたのがほとんどだと思います。

酒井　それは市場原理に則って輸出していたのか、それとも積極的に推奨して売っていたのでしょうか。

森理恵　朝鮮の場合は、在朝鮮日本人がいますので、三越などたくさん着物屋さんは朝鮮にありました。向こうにいる日本人向けのキモノということですが、それだけではなく、カフェの女給さんや朝鮮人の人もそういうものを着ていました。台湾もそうだと思います。東南アジアについては、からゆきさんと一緒について回って、行商のような形で、反物を売って歩いた人がいました。シンガポールにも着物屋さんがあったとされています。ただし、生産は日本が中心だったと思います。朝鮮はあったかもしれませんが、生産は日本が中心だったと思います。

酒井　台湾では本当に日常着というかたちで着られていたので、恐らく駐在している日本人は高給取りだし、上層階級なので、それこそ三越などで買うようなキモノでいいと思いますが、一般庶民の手に入るようなものが売られていたというのは、おそらく日本人の顧客とは違うところかと思いました。

森理恵　日常着までなっていたのは留学生などだと思います。台湾や朝鮮で、庶民の日常着というところまでは、おそらくなっていないと思います。コスプレみたいなときに着たり、その程度だったとは思います。ただ値段の調査まではできておりません。そのあたりも調べたほうがいいと気が付きました。ありがとうございます。

後藤絵美　日本の象徴としてのキモノの登場というところが一つ重要な転換かと思いましたが、およそ第二次世界大戦の終わり頃と理解できるのでしょうか。それについてもう少しお話しいただければと思います。日本の象徴としてのキモノという意識が盛り上がってくるのはいつ頃でしょうか。

森理恵　盛り上がってくるのは1937年以降かなと思います。日中戦争の頃です。ただし、それより前にそういうものがないわけではないので、徐々にかなと思います。日中戦争期に、「政府の要人が家では和服でくつろいでいます」という新聞記事が出たりします。

それより前は、先ほどどこかの国の話であったかもしれませんが、キモノというのは遅れたものなので、政府の要人がキモノを着ているところは見せない。近代服である洋服を着て出てくるというのが明治以来、福沢諭吉以来の方針でした。ところが日中戦争のあいだに、急に政府の要人のキモノ姿の写真が出てくる。もちろん公の場ではなく家での様子ではありますが、出てきます。

国民服や標準服の制定のときも、いかに日本的な要素を入れるかが問題になりました。完全な洋服になってしまうと日本の国民服にならないので、いかに日本的要素を入れるかという議論も始まります。徐々にではありますが、日中戦争期とか、アジア太平洋戦争期とか、そのあたりで、「近代の超克」もありますよね。そういうなかで盛り上がっていったのかと考えています。

磯貝真澄　基本的なことをお伺いしたいのですが、キモノというのは晴れ着の要素が強くなればなるほど、着方を知らないと着られないと言いますか、着るのが難しいと思います。そういう着付けの仕方を教えるようなことが、朝鮮半島や台湾であったのでしょうか。あるいは日本の女学校だと、裁縫の授業で、みんな和服を縫えるようにという指導をしていたと思いますが、そういうところと比べて朝鮮半島や台湾で何があったのかということについて教えてください。

森理恵　私もよくわかっていませんが、台湾の女学校では和裁を教えています。生徒が台湾の人であっても和裁を教えて、そのなかからこういうものが出てくると思います。昔の着付けは現在ほど難しくはないです。当時は、日本にもないので、台湾や朝鮮に着付け学校はないと思います。

朝鮮で「朝鮮の女性にもっとキモノを着てもらおう」みたいな総督府の方針があって、朝鮮女性の意見

を聞いたら、「あれは着方が難しいから無理です」と言われたとかいう議論は雑誌にも出てきます。ただし、それが組織立ったかたちで「キモノの着付けを教えます」みたいな教室なり学校なりがあったということは聞いたことがありませんが、まだよくわかっていない状況です。

和崎　私はウズベキスタンが専門ですが、本務先で一般教養の日本の歴史も教えろと急に言われて、ライフワークで柔道をしているので武道を通して近代史を勉強して教えています。そうすると、満州事変以降に武道の盛り上がりが激しくなって、神社と武道が一体となって動いている感じがしたのです。鳥居なども台湾に建てていますね。日本の象徴としてのキモノが日中戦争以後とおっしゃっていましたが、神社の建設もそれぐらいに起こったのでしょうか。

森理恵　神社の建設はもっと早いんじゃないですか。釜山などには、すごく早くから神社ありますよね。神社の建設はもっと早いと思います。日本人が行くところには必ず神社を建てる。そういう研究の本がありますが、いつ頃からかは、すみません、私もきちんと憶えていません。

和崎　さまざまな文化的なものや宗教的なものが、段階的に輸出されているということでしょうか。

森理恵　でも、私はまったく知りませんでしたが、柔道の盛り上がりとは符号しますね。

和崎　そうですか。日中戦争というよりも、むしろ満州事変以降に、国策として大日本武徳会というものがすごく強化されていく感じです。

森理恵　『ジャワ・バル』にもたくさん武道が出てきます。剣道も柔道もやたらめったら出てきます。

和崎　ありがとうございました。

コメント1

後藤 絵美　東京大学

本日は充実した時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。いずれの報告もたいへん興味深く拝聴しました。簡単に感じたことと、質問を述べたいと思います。

先行研究におけるパルダ概念解釈の根拠とその変容 ── 賀川報告について

まず賀川さんのご報告ですが、ヴェールをまとったり脱いだりするという実践が、状況に応じて刻々と変化しつつ起こりうるという事例で、「ヴェールは一度着たらやたらと脱げないもの」という意識の強い中東研究者も多い中、いろいろな示唆に富んでいたと思います。

確認としてうかがいたいのが、先行研究に関わる部分です。パルダ概念とは「男女の分離」や「女性隔離」だと一般に言われていて、研究書でもそのように書かれているとおっしゃっていたと思いますが、それがたとえばイスラーム法学上の位置づけとは異なっているとすれば、それらの研究や意識はいったいどこから来たのか、何を根拠にパルダ概念はそのように理解されてきたのかを教えていただきたいです。

また、賀川さんの調査の結果でわかったことについては、「なるほど」と思ったのですが、2017年、2018年の調査で見たことなので、その時点での一つの結果である、ということかと思います。パルダ概念について、「この時点でこういうものが見えました」ということがわかったとしたら、それはいつ頃から、どのようなかたちで変化してきたのか（あるいは変化してこなかったのか）という時間軸の話についても、今後の課題かもしれませんが、わかることがあれば教えていただきたいです。

トルクメニスタンの服装統一のプロセスとは ── 岡田報告について

岡田さんの発表については、トルクメニスタンの位置も人口もGDPも初めて聞いた者としては、何もかもが興味深いというところでした。とくに、独立に際して国家の統一、文化の統一を目指して制服というかたちで服装規定が入ったという点がおもしろいと感じました。実は私が以前調べたサウジアラビアも似たようなことがありました。同国では、各地方に固有の伝統服があり、男性も女性も地域によって随分異なる形状の装いをしていたのですが、1932年の独立後、初代国王のアブドゥルアズィーズが、国民意識の統合を促そうと── まさに同じような話ですが、公務員の男性の衣服をナジュド地方の伝統服で統一しました。結果として、他の伝統服は廃れて、現在私たちがサウジアラビアについてイメージする、長い白いシャツであるトーブ、黒やベージュの外套であるムシュラフ、格子柄や白のグトラやシュマーグと呼ばれる被り物、それから黒いロープであるイガールというものが統一して、サウジアラビアの服だということに決まったというのです。

女性に関しても同じで、もともと地方固有の色柄があるかぶり物があったのですが、全体に黒く、全身を覆うアバーヤというものに統一されました。これはある地方のものというよりは、ワッハーブ派などにより宗教的な規範が強まったことで統一されたと私は勉強したことがあります。

二つの事例を合わせつつよくよく考えてみる中で、このような規定の実践はどうやって進んでいったのだろうかという疑問を持ちました。岡田さんにうかがいたいのは、服装に関する統一は、トルクメニスタンにおいて、どのようなプロセスを辿ったのかということです。調査がしにくい、資料を入手することがなかなか難しいかと思いますが、何か手がかりとなるような情報があれば教えていただきたいと思いました。

キモノはいかに周辺国との関係性をつないだのか ── 森報告について

最後に、森さんのお話についてです。今回の企画の前文にあるように、私たちは「装いは価値観や信念、思想、規範などの目には見えないものを映し出す鏡である。その時々のファッションを見ることで、それぞれの時代の人がどのような美意識を持ち、何を大

切にしていたのか。どのような枠組みのなかで生きてきたのかを知ることができる」と捉えていて、こうした内容について考えたいと思いつつ取り組んでいます。

そこで本日、森さんのお話を聞いてハッと気づきました。現代の私たちが持っている価値観や信念、あるいは思想、規範というものがある。たとえばキモノなどは日本人にとっては国民服であり、伝統服であるということが、おそらく私たちの頭の中に確固たるイメージとして埋め込まれています。そして別の文脈でそれが使われている場面を見たときにも、ついつい同じ価値観や規範を読み込んでしまうのです。

たとえば、森さんの報告で見せていただいた台湾の現地の人たちの写真を見ても、日本の価値観や規範を押しつけられているのだ、「着せられて写されたでしょう」みたいなことをついつい思ってしまうのではないかと思います。しかし、私たちの現在の価値観や思想が当時本当に共有されていたのかどうかについては、常に疑問に持たなければいけないということがわかりました。ありがとうございました。

その意味で、東南アジアのからゆきさんの事例などは、書いた本人も「なぜ」と思ったんですよね。「なぜキモノ着ちゃいけないの」と思ったわけです。同じ空間にいながらも違う規範が読み込まれていて、それぞれの文脈がとても大切だということがよくわかりました。

森さんなら大丈夫だと考えて、少し答えにくそうな質問をさせていただきます。キモノというものがいくつかの空間で出てくる話を教えていただいたわけですが、キモノを通した関係性というものがもしあるとすれば、どのような関係性が読み取れるのでしょうか。つまり、私が最初に何も考えずに思ったように「日本の象徴としてのキモノを押し付けられた」という関係性ではないとして、さまざまな意味が浮かび上がってくると思います。森さんがこれまで研究を進められたなかで、キモノというものが近代日本の国家主義・帝国主義のなかで周辺国をどのようにつないできたのかについて、何か思うところがあれば、感触を教えていただけたらと思います。

コメント２

帯谷 知可　京都大学

私もそれぞれのご報告を、たいへん楽しませていただきました。ありがとうございました。なかなか全部をまとめるのは難しいですが、いずれも、現代において「これが私たちの伝統だ」と思われているものが、意外に新しいものだということがよくわかるご報告だったのではないかと思います。伝統は変わらないものだと思いがちですが、かなり刻々と変わっていくし、その変わっていく過程で、さまざまなことが起こっていくものなのだとあらためて感じました。

すべての報告に関わるようなコメントとしては、近代的な、あるいはこれから目指すべき装いとか、いまの時代にとって現代的な装いというものが、伝統を脚色するようなかたちで刻々と作り変えられていくプロセスが、たいへん興味深いと思いました。

森先生のご報告では、キモノをハイファッションとしてどう見るかというお話もありましたが、私はウズベキスタンのことを研究していて、ヴェール問題に関心を持っていろいろ情報収集をしてみましたら、伝統的な中央アジアの絹絣などの素材や刺繍のデザインを使ってオスカー・デ・ラ・レンタやグッチ、ヴァレンティノが近年作品を作っていて、「中央アジア・イカット」がかなり流行しているということを知りました。そのようなかたちで、世界各地の民族衣装や民族衣装に使われる素材・技術が今やグローバルな場に出て、ハイファッションに使われるという例がたくさん出てきているようです。そのような方向性も、装いと規範を考えるに当たって私たちは念頭に置いてよいのではないかと感じました。

パルダにおけるイスラーム的要素と南アジア的要素 ── 賀川報告について

個々のご報告に対していくつか質問させていただきます。最初のご報告に対して、賀川さんとは今まで何回かいろいろな場面でお話をしているので、また少し異なる視点から一つお聞きしたいと思います。パルダというのは、私たちからするとイスラーム的な慣習だと思ってしまいますが、実は南アジア的なものでもあるわけですね。イスラーム的なものと南アジア的なものがパキスタンのパルダにおいて、どのようなかたちで結び合わさっているのか、賀川さんご自身は現時点でどう整理されていらっしゃるか、お聞きしたいと思います。

もしかすると、南アジア的な覆いは、中央アジアとも関係があるのではないかと最近ぼんやり考えていまして、賀川さんが南アジア的な覆いの文化とイスラーム的な覆いの文化のいわば関係性について、どう考えていらっしゃるか教えてください。

伝統衣装の位置づけとイスラーム過激派への懸念 ── 岡田報告について

岡田さんのご報告に対しては、同じ中央アジアなので、おうかがいしたいことがたくさんあります。やはりトルクメニスタンというのは中央アジアでは圧倒的に情報が少ない国で、ご報告を聞いて本当に不思議の国だなという印象も強くしました。

ご報告の中で、トルクメン女性の伝統的な衣装で一番上にかぶるものとしてご紹介いただいたものがありましたが、私が研究室から持ってきたこの衣装はたまたま同じタイプのトルクメンのものです。袖が背中側で縫い留められていて、実際には袖は通さず頭からすっぽりかぶります（資料４－１）。トルクメニスタンの場合は生地や刺繍がたいへん特徴的ですが、まったく同じ形状のものがウズベキスタンでは明確にイスラーム・ヴェールと位置づけられていました。1920年代には、女性にこのヴェールを放棄させることが、ソヴィエト体制下での女性解放の象徴でした。ウズベク語で「パランジ」と呼ばれるこのヴェールを着けた女性がいない社会を築くことが近代化の象徴であり、女性はこれを着用しないように、男性は身内の女性にこれを着用させないようにしようという共産党主導の強力なキャンペーンが行われました。トルクメニスタンでは当時どうだったのか、ご存知でしたらお聞きしたいと思います。イスラーム・ヴェールというような位置づけはなかったのでしょうか。

資料4－1　トルクメニスタンのチュルプィ
ほぼ同様の形状の長衣はウズベキスタンではパランジと呼ばれる
〈帯谷知可所有〉

トルクメン人のような遊牧民の場合にはあまりヴェール着用の実態はなかったという一般的な理解はあるかと思います。ソビエト政権もそういう認識をもっていて、遊牧民については、ヴェール着用よりは、花婿側から花嫁側の家族への莫大な婚資の支払いと女性の隔離が女性解放の象徴になったとされているようですが、そのあたりトルクメニスタンでは具体的にどうだったのでしょうか。

「コイネック」という語彙についても、興味深くお聞きしました。ウズベキスタンでも女性がふだん着るゆるやかなワンピースのことを一般名称として「コイネック」とトルクメニスタンと同じ名称で呼んでいますが、これをアレンジして制服にしようという議論はないようです。

また、国家が服装を管理しようとすると、対象はやはり女性に向かいがちですね。近年タジキスタンでは、職場ではこのような、家ではこのような、学校ではこのような服装をしなさいという具合に、場面に応じた女性の服装のガイドブックのようなものが出されたそうです。現物はまだ見たことがありませんが、数百ページぐらいあるものらしいです。またウズベキスタンの大学でも、男女別に「学生はこういう服装で大学に来るように」と服装コードを設定する事例が見られます。女性に対しては、ヒジャーブは絶対にいけないし、かといって肌の露出が多過ぎても、ボディラインが強調され過ぎてもいけない、という指示が含まれています。

どうもこうしたタジキスタンやウズベキスタンの例では、明らかに「女性にイスラーム的な服装をさせない」、「ヒジャーブ禁止」という意図が服装管理の背後にあって、それはイスラーム過激主義がそこから始まるという固定観念が強いためのようです。国境を接するアフガニスタン情勢が流動化したりすれば「タリバーンが力を盛り返してその影響が及んでくるのが怖い」という意識があって、それをひどく懸念しているのだと思いますが、トルクメニスタンでは、イスラーム過激主義に対する過度の懸念が、服装の管理などに反映されていることはないのでしょうか。イスラーム復興の全般的な状況なども、おうかがいできればと思います。

日常生活であえて和装をする人たちの思いとは ── 森報告について

森先生のご報告については、近代化の過程でいったん洋装にいったものが、ナショナルな意味を持たされて和装に戻ってくるという部分が、たいへん興味深いと思いました。中央アジアでも、女性解放運動の過程で洋装や断髪の奨励を盛んにしていました。「ヴェールを捨てて、ブラウスとスカートを着て、ボブカットに」というスタイルが理想にされた時期が1920年代、1930年代にありました。実際には、なかなか一足飛びに洋装には行けなかったのですけれど。

もう一つ、半ば趣味の話になりますが、実は今ではすっかりタンスの肥やしになっていますけれども、私は以前キモノが大好きで、『美しいキモノ』や『きものサロン』という重たい雑誌も捨てられなくて、今も家にたくさんあるくらいです。それはさておき、近年では、先ほどもお話に出ていました「きものde銀座」のようなかたちで、あらためてキモノを愛好する人が一部で増えていますね。「キモノで暮らしましょう」という人たちもいて、そういうなかに「キモノ男子」といった人たちもいますね。京都大学にもいて、キャンパスでときどき目にします。そういう人たちは、どのような思いで「日常生活をあえてキモノで」と思っているのか、もし何か調査等からご存じのことがあれば、お聞かせください。

コメント３

酒井 啓子　千葉大学法政経学部

私はこのワークショップの共催組織である「グローバル関係学」というプロジェクトの研究代表をしております。おそらく研究代表者として何か話せということでコメントの順番を最後に回されたに違いないと勝手に解釈しましたので、まず趣旨についてお話しして、それを踏まえてワークショップの感想をお話しして、そのうえで質問をさせていただければと思います。

本質主義に陥らずに関係性から世界を考える――「グローバル関係学」の趣旨とねらい

「グローバル関係学」は長い名前を省略したもので、これだけでは何をしようとしているのかよくわからないと思いますが、これはけっしてグローバルな関係を学ぶ学問という意味ではありません。これは単なる略称なので、まずはその趣旨についてお話しします。私は中東研究が専門で、とくに紛争地域ばかりを対象にしていますので、グローバルに影響を持つ危機的な状況が、近年多々発生していると感じます。シリア内戦もそうですし、それに伴う難民問題や、イラク戦争のように地域からグローバルに影響が出るような戦争もあります。こうした近年のグローバルな危機の現象を取り上げる際には、これまでの学問体系ではうまく説明できない。そこから始まって、関係性に焦点を当てた新たな学問的視点を導入したいと考えて立ち上げたプロジェクトです。

関係学というと、あちこちで取り組んでいるじゃないかと言われがちですが、すごく簡単に言ってしまうと、国際政治において、主体の本質を中心に見るものではなく、「関係性があってこそ主体が浮き上がってくる」という、従来の考え方の順番を逆にした発想です。私自身は地域研究者として、アジア経済研究所で長く研究していて、イラクという国を担当していました。アジア経済研究所でしばしば地域研究者同士が自己否定的に言うのは、「地域研究者はいかに『出羽守（でわのかみ）』にならないようにするか」という言い方をしています。つまり、とくに国別の担当で地域研究をしていると、ついつい「イラクでは」、「シリアでは」、「サウジアラビアでは」という、自分の担当国がいかにインテグリティを持った、本質性を持った実態なのかということを語りたがってしまう。かといって、それをなべて一般化してしまうと、当たり前とされていることしか残らず、すごくつまらないものになってしまう。

その意味で、いかに本質主義に陥らず、しかしその文化的な多様性など、さまざまなものが関係の変動によって、あるいは関係の交錯の仕方によって、どう変化していくか、を見ることが重要なのではないかと考えます。あるいはこれまでになかったような主体が浮き彫りになっていくか。あるいは、それまでみなされていた主体が変わっていくか、消えていくか、そういった点を研究するのが、このグローバル関係学という考え方の中心的な議論になります。

本質を超えて歴史的・地域的な解釈がなされ関係性をみる際に恰好の材料となる「装い」

そのような関係性をいかなる手法を用いて分析するかについては、さまざまな方法論があるわけです。たとえばビッグデータ使ってネットワークを解析するというグループもあります。このＢ01の「規範とアイデンティティ」班では、シンボルやモノに象徴されるものを取り上げて、そこから浮き彫りになるさまざまな関係性の変化を見たいと考えています。とくに装いというのは、本当にその典型だと思っています。本日の報告も、みなさんそれにすごくよく合ったご説明をいただいたと思います。

というのも、私はイスラーム圏を研究していますが、スカーフ１枚、ヴェール１枚を採ったとしても、それが持つ意味というのは社会関係のなかで浮き彫りになるわけで、ヴェールそれ自身に意味があるわけではありません。日本における一般的な質問で、「ヴェールはなぜかぶるんですか」と、よく学生さんなどから聞かれますが、ヴェールそのものに何か本質的な意味があるように思われるわけです。しかしそうではなくて、それがさまざまなコンテクストのなかでいろいろな意味を付与されて、歴史的にも地

域的にも違うところで解釈されていく。「装い」はその部分を見ることができるとてもいい材料だと思っていて、このワークショップをとても楽しみにしています。

近代性やナショナル性が複雑に絡み合った存在としての「キモノ」

その意味で森先生の話は、「まさに」という感じでお聞きしました。ですから質問ではなくコメントとして申し上げると、日本のキモノが民族服として、植民地支配のツールとして向こうに行ったという話はとてもわかりやすいのですが、同時に、行った現地ではそれが一つの近代化の象徴として受け取られていた。これはある意味では、ヨーロッパの洋服と同じですよね。西洋風の服装を着ることが近代化である。べつにイギリスにおもねるわけではないけれど、それを着ることで自らを近代化させる。ですから、頑迷固陋な反欧米ナショナリストも洋服を着ていたりするわけです。こうした近代性やナショナル性など、さまざまなものが交錯する、混ざりあうかたちで、キモノというものが外地でどう消費されて、どのように解釈されたかという部分が、とても興味深いと思いました。

先ほどの質疑応答でキモノが現地生産なのかどうかを聞いたのは、そこなんですね。現地社会において、ヨーロッパからの洋服のように、強制されたものではなく、積極的に「自分たちもああいう近代化された服装をしてみたい」と思って生産するメカニズムがあって、そして現地の人たちが手に入りやすい値段で入手できるまでになったものなのか。それとも、「やっぱり植民地発信のものだから、もういらないや」という話になったのかという意味で、先ほど質問させていただきました。とても勉強になりました。ありがとうございました。

パルダにおいて男子学生の存在と学歴の関係は ── 賀川報告について

あとのお二方には質問です。帯谷先生から賀川さんに質問があったパルダの話は、私も聞きたかった同じ質問です。ヒンドゥー教でも意味が違って同じように使われていると言っていたので、「イスラーム的だ」と思われている服装のコードが実は別のものだったり、別のものと交錯したなかで違うバージョンになったりということがあるのかと思ったので、同じ質問をシェアいたします。

関係性に関連して、賀川さんにコメントです。インタビューをされたときに、グループ・インタビューと単独インタビューがありますね。そこで回答がどう違ったかが、とても重要だと思います。というのは、「みんながスカーフをかぶっていないところで私だけしているのもなんだから、大学では脱ぐわ」という話ですよね。ということは、本当はかぶっていたいけれども、「そんなものには大して重きを置いてないわよ」というグループと一緒にインタビューされたなかで答えたら、「私も脱ぐのよね」と言うと思います。まとめてインタビューするグループ間の関係や男女比など、コンテクストでインタビューの回答は絶対に変わりますので、その点は注意して、分析を分けたほうがいいと思いました。

また、すごく興味深いと思ったのは、後藤さんもそうだと思いますが、中東の文脈で言うと、中に着ているのはピチピチのTシャツだったり、お尻の線がバッチリ出たようなジーンズだったりしますが、ヴェールの脱ぎ着というのは、あまりないですよね。そういう人には会わない。中東では、スカーフだけは絶対に朝から晩までずっとかぶっているけれども、逆に中に着ているもののほうがダブダブではなくなっていくという変化を起こしている。ですから私は衝撃を受けたわけです。

大学内であっても、朝していたスカーフを脱いでしまうことには抵抗がある。私自身もそうでした。私自身は、カイロの町中を歩くときはスカーフをかぶりますが、人の家に入ったら脱ぐ。「なんちゃってムスリムだよね」と笑われていたので、そのあたりがコンテクストによってまったく違うというのが興味深いなと思いました。

あと、これは質問ですが、大学内ではスカーフを脱ぐという答えですが、写真を見ていると女子大生が多いですね。これは男性がいても脱ぐのでしょうか。それも、女子大生ばかりだと脱いでしまってフリーになるということがありますが、そこのビヘイビアの違いが、男子学生がいても同じなのかどうなのかが気になりました。

最後の質問ですが、賀川さんの調査では、大学に行っている女子大生、高学歴を対象に聞いたとおっしゃっていました。それとは別に、地方から出てきて、もともと地方でスカーフをかぶる、ゆったりした服装をするということが当たり前とみなしてきた人た

ちが大学に行って変わっていくのではなくて、都市には仕事で出てくる人たちもたくさんいるわけです。そういう人たちは、それほど高学歴ではなくて、中ぐらいの人たちが多い。そういう人たちも同じ感覚なのか、その人たちのビヘイビアはまったく違うのかという比較は、ぜひしていただきたいと思います。先ほど言った「ヴェールだけは絶対外さないよね」というのは、どちらかというと後者のパターンが多いと私は思っていたので、そのあたりについて今後の調査でわかれば興味深いと思いました。

トルクメンの服装にトルコと外国人労働者の影響は――岡田報告について

岡田さんの話も本当に興味深いものでした。私はイラクを研究していたので、社会主義下、統制下のイスラーム社会がどうなのかという点については、パラレルに聞こえるところがあってとてもおもしろかったです。とくに民族をまとめるために一つにしたという点も、「イラクの民族政策と同じようなことをやっているんだ」という感じで興味深く思いました。

３点聞きたいと思います。まずは簡単な質問からです。基本は世俗ですよね。イスラーム性が薄いということが徹底されていると思いますが、国旗を決めたのは独立以降で、そこに緑を使っていますよね。国旗に緑を使うのは、かなり意図的にイスラームを意識した色の選び方だと思います。緑が選ばれたという点が繰り返し出てきて、そこにはものすごくイスラーム色を感じますが、その背景はどうなのでしょうか。パキスタンにしてもサウジアラビアにしても、国旗が緑一色の国は相当イスラームを強く謳っている国です。ですからそのあたりについてうかがいたいと思います。

あとの二つの質問は、先ほど話した関係性に関連したものです。国内の話をもっぱらされましたが、最後のファッションの動画を見たときに、「こういう映像はトルコでしょっちゅう見たぞ」という感じの映像でした。トルクメニスタンですから、文化的な影響はきっとトルコから相当受けていると思います。いくら永世中立でかなり閉ざされた国だといっても、ファッションの変化にトルコの影響はどの程度あるのか。しかもトルコは、先ほどの話ではありませんが、イスラーム化と世俗化との間を行きつ戻りつしているわけです。その行きつ戻りつのトルクメニスタンに対する影響、トルクメニスタンでどのようにトルコの行きつ戻りつを受容しているのかという点が知りたいと思いました。

最後に、これも関係性に関連しますが、トルクメニスタンは石油産油国として、言ってみれば完全にレンティア国家で、国民がすごく裕福ですが、外国人労働者はいないのでしょうか。湾岸諸国でよく言われるのは、外国人労働者と国民がかなりセグメントされていて、外国人労働者からの文化的・社会的な影響を国内社会がいかに受けないようにするか、社会を分断するのが重要です。

たとえばかつてのサウジアラビアは、うっかりパレスチナ人やシリア人などの外国人労働者を使っていました。それによって、世俗的な思想が外国人労働者から本国の国民に入ってくるという影響を受けていました。その観点から、もしトルクメニスタンに外国人労働者が入っているのであれば、そこからの思想的・文化的・社会的な影響性が資料のなかでは見えなかったので、何かあるなら教えていただきたいと思いました。

ディスカッション

●討論参加者
賀川 恵理香（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程）／岡田 晃枝（東京大学）／
森 理恵（日本女子大学）／後藤 絵美（東京大学）／酒井 啓子（千葉大学）／帯谷 知可（京都大学）／
磯貝 真澄（京都外国語大学）／中村 朋美（関西大学）

●司会
和崎 聖日（中部大学）

和崎聖日（司会）　それでは報告者のみなさんから、コメントと質問に対してご返答のほどをお願いします。

■先行研究がパルダを女性分離と捉えた社会的・歴史的背景

賀川恵理香　まず、後藤先生からの二つの質問に回答させていただきます。なぜ先行研究で分離の話が出てくるのか、イスラーム的法学上の話とはぜんぜん異なっているのではないかというご指摘ですが、私も最初にパルダを勉強しようと思ったときに、そこが一番ひっかかっていました。パキスタンに行くと、彼女たちはパルダをイスラームのものとして語るし、イスラームの意義付けをします。しかし研究書や論文を読むと、そこには「これは女性隔離のものだ」と書いてあります。

これはなぜだろうと考えると、パルダの研究が始まったのは1960年代や1970年代ですが、そのときには社会学の研究者たちがこぞって研究していて、社会において女性がどのような役割を担っているのかという性別役割の話がすごく出てきています。現地の女性たちがどのように意義付けているかというよりも、女性が社会でどのような役割を担っているのかという点で見ている。たとえば女性が家の中の仕事をしているとか、男性が公的な空間で生活をしているとか、そういうところをマクロな視点で見ています。だからパルダを女性隔離というか男女の分離の制度と捉えているのではないかと考えました。

最近の研究ですと、女性に対する聞き取りも行われていて、女性がイスラームにおいてどのように意義付けているのかといったことも書かれていますが、やはり研究の前提に、パルダというものがヒンドゥー、南アジア全体にあって、女性を隔離するとか男女の分離ということが、宗教に関係ないところで前提となっている部分があるので、そういったものが強く表れているのではないかと考えています。回答になっているかわかりませんが。

■アバーヤの形態と用途の多様化における歴史的変遷の様相

賀川　もう一つ、時間軸で見たらどうなのかという点ですが、そこは私もすごく関心があります。1970年代後半のムハンマド・ジア＝ウル＝ハクのイスラーム化政策のときに、政府の職員やメディアに出てくる女性が頭の覆いを強制されたという背景があって、現在60歳代、70歳代ぐらいの女性と話をしていても、その時代にヴェールを纏う女性たちがすごく増加していったという話は聞かれました。

そうしたかたちで、2008年に民政化してからずっと民政をしていますが、やはりイスラーム化の影響もかなり残っていて、ヴェールも増えています。ただし、それを単純にイスラーム復興として見ることはできないと感じています。なぜなら、一つは、アバーヤのデザインがすごく多様化してきています。また値段についても、普通にシンプルなものなら日本円で1,500円から2,000円で買えますが、先ほどお見せしたショッピングモールには8,000円ぐらいするア

バーヤが出てきていて、かなり装飾的なものが増えています。バーザールでも、1,500円のものもありますが、近年は3,000円ぐらいの少し高級なものが増えてきていて、ファッションとしてアバーヤを着るという側面も、かなり増えているのではないかと考えられます。ですから、単純にイスラーム復興として捉えることはできませんが、「アバーヤなどの多様化が起こっている」――という言い方をするとすごく単純化してしまいますが、そういう言い方ができるかなと考えられます。

■南アジア的な文脈とヒンドゥーの文脈からみたパルダ

賀川　帯谷先生と酒井先生からありました、パルダが南アジア的な文脈ではどう語られるのかという点については、正直まだ分析が進んでいないところです。私が現在考えていることを申し上げると、南アジアの、しかもパキスタンの文脈というのは、やはりすごく混淆的な場所という感じがしています。と言いますのも、たとえばペシャワールのパシュトゥーンの女性たちは、いわゆるブルカ、目のところに網が付いていて、上からかぶるというタイプのブルカを現在でも着ています。また、私が調査に入っているのはパンジャーブの村ですが、そこでもかつてはそれを着ていたという女性たちもいて、そういったものが混じっています。

あとはヒンドゥーの文脈で申し上げると、ヒンドゥーの女性たちは夫よりも上の立場にいる男性の前では顔を覆いますが、親族男性以外の男性の前ではべつに顔は覆いません。夫を基準として考えるところがあります。現在はどうかわかりませんが、1960年ぐらいの文献では、ムスリムでもそういったかたちでしている人もいると述べられていて、かなり混淆的なところもあります。

もう一つ申し上げると、私がパンジャーブの農村に調査に行ったときに話を聞いた女性は、嫁いできた家がかなりパルダに厳しいので、基本的に家の中でも顔の覆いをしているといいます。でも、彼女はある義弟の前では覆いをしていません。自分の夫の家族の前では覆いをしますので、義弟、夫の弟はしなくてはいけない存在なのですが、「この子は昔から知っているから、べつにしなくてもいい」といったかたちで関係性によって変わるということがわかりました。ですから、誰の前でどこを隠すのか、何で隠すのかなど、そういった側面でかなり混淆的なところにあるのがパルダなのかなと、現在では感じています。

■単独インタビューとグループ・インタビューにおける回答行動の差

酒井先生からのご指摘があったインタビューのお話は、たしかにそうだと思って反省していて、今後は単独の話とグループの話で分けて考えたいと思いました。一つエピソードがあって、「大学内では脱いで、大学の外では着ます」というグループへのインタビューで話をしていたときに、ずっとアバーヤを着ている女性と、状況によって変えるという女性とが入り混じった空間で話をしていました。そのときに、「アバーヤってどんなものなの」と聞くと、変えるという女性４人ぐらいが「アバーヤをずっと着ている人は、わざわざ隠しているし、盗みとかを働くことがある」というネガティブなことを言い始めました。そうして話していると、変えないという１人は黙りこくってしまって、インタビューが終わったあとには泣き始めてしまいました。「なぜそんなにアバーヤを否定するようなことを言うのか」と喧嘩になってしまった場面があって、そこは私もすごく反省しました。やはりグループでインタビューする意味を、きちんと考えなくてはと思いました。

次に、男性がいても脱ぐのかという点ですが、男性がいる状態で脱いでいます。ただし、報告でも申し上げたとおり、男性がいる前でパッと脱ぐわけではなく、いないところ、コモンルームなどで脱いで出てくるというかたちです。

状況に応じて変わるという部分がおもしろくて、大学のキャンパスは道を挟んで分かれていて、道は公道なので物売りの男性などもいるんですね。そのあいだは30メートルぐらいですが、そこを歩くときには、ドゥパッターの裾をヒュッと上げて、気持ち頭に載せているみたいな状態で、べつに髪の毛が全部隠れているとかではなく、載せていることが重要というかたちで歩いているところも見るので、そこはおもしろいなと思います。

あと学歴についてですが、まだアクセスができていなくて、自分が入れるところが大学の寮なので高学歴女性を対象にしましたが、中ぐらいまたは低ぐらいの学歴の方にも今度は調査を進めていきたいと思っています。

和崎　ありがとうございました。続いて、岡田先生お

願いいたします。

■コイネックのトルクメニスタンへの導入過程とソ連期におけるイスラーム・ヴェールの扱い

岡田晃枝　コメントと質問をありがとうございました。まず後藤先生から、民族ごとにさまざまな衣装や装飾品があるなかで、どのようにして現在のかたちが決まったのかというお話がありました。実際に現在の制服になっているコイネック自体は、ものすごくゆるいものです。単に長いドレスであって、襟元には刺繍がある。先ほど写真で見ていただいたように、襟の形も何パターンもあって、自分で選べるようになっています。

生地に関しては、少しいい生地を強制的に導入したので、それが経済的負担になるのではないかという海外のニュースがありました。しかし、それはとくにどこの民族のものを採用したということではなく、どこにでも共通するような、簡単な要素だけが出てきているのではないかと思います。もしかしたら、民族ごとにいくつか呼び名があったりはしたのかもしれませんが、とにかく「ケテニ」という生地を使ったコイネックということ自体は、トルクメニスタンの全体にほぼ共通するようなものだったと理解しています。

帯谷先生からパランジの話がありましたが、トルクメニスタンでも同じものがあって、「チュルプィ」と言いますが、それはソ連期の前までは使われてはいたようです。外に出るときには、それをかぶることになっていました。これを脱ぐことがどのようにソ連政府から奨励されたかといったら、ウズベキスタンとほぼ一緒だと思います。そのあたりのことは私の研究の対象外だったので見ていませんが、おそらく似たような闘争があったのだと思います。ウズベク人と違ってどのぐらいトルクメン人に脱がせるのが容易だったかについては、わからないところです。調べる機会があったら、ぜひ調べてみたいと思います。

■トルクメニスタンにおけるイスラーム過激派への意識と対応

岡田　イスラーム過激派については、過激派の芽が出る前にすべて摘みとって追い出していますので、女性の服装によってそれを抑制することが必要かどうかについては、わからないところです。それ以上に政治犯の早い確保がなされます。とくに男性政治犯が圧倒的に多いです。本当に政治犯なのか、それとも単に大統領が嫌いな人なのかわかりませんが、政治犯であろうという理由をつけられる人が出てきたら、即刑務所送りです。その意味で、イスラームの過激派が何か行動を起こすことはあまりありません。実際にものすごく平和というと変ですが、安定は揺らがないかたちにはなっています。

おそらくこれからも、イスラームの過激派がトルクメニスタンに入ってくることは、かなり難しいと思います。ものすごい警察国家で、ソ連時代を彷彿させるようなものがあります。その一方で、たとえば外国人に対する警戒などは徐々に弱まってきています。

学生を連れて現地に行く際に、3年ぐらい前までは、「私も学生寮に泊まりたい」と言ったら、「学生さんは泊まってもいいけど、先生は別のところに泊まって」と言われました。これから自分の考えを構築していく学生に、外国の知識人を接触させたくないという事情が背景としてあったようです。ところが翌年行くとそれがガラッと変わって、私も「学生寮の部屋に泊まっていいよ」と言われました。部屋数が足りなくて結局は出たのですが。ですから、いろいろなことが変わってきて、どこでどう転んで、それが極端なかたちになるかは予測できないところがあります。

■トルクメニスタンの国旗の緑と「装い」におけるトルコからの影響

岡田　最後に、酒井先生からの三つの質問についてです。国旗に関して、緑ではありますが――トルクメニスタンはイスラーム的な要素が、中央アジア5か国の中で強いかというと、おそらくそれはまったくないですね。

イスラーム教のいいところは吸収しようとしますが、逆に集会は嫌いますし、先ほども言ったように、イスラームの過激派が入ってくることもものすごく嫌います。ですから、国民を敬虔なムスリムにしようという気は、おそらくないと思います。ですからトルクメニスタンの国旗が緑であることに「イスラームを謳う」という背景はありません。それよりも五つのマークが各地方を象徴するものであることと、2007年の改定であの下に国連のマークから採ったものが入れられたということが、彼らにとってはすごく自慢らしいので、そちらの話ばかりになってしまいます。

トルコの影響ですが、強くあります。ただし、コ

イネックに関することというよりは、いわゆる洋装の部分です。彼らはトルコに買い物に行っています。トルクメニスタンの国内でも、洋服は調達できますが、それよりもおしゃれなものを買いに行く先がトルコです。ですからトルコのファッションの影響は強くありますし、彼らの少し先、自分たちが少し背伸びして手に入れられるいい服がトルコにあるということは言えます。

そのなかでの考え方や、トルコの保守や政治などの行き来に関してですが、ここが連動しているかどうかについては、また別の話です。トルクメニスタンの体制にとって、トルコが利用できるもの、あるいは好意的なものと考えれば寄りますし、そうでなければ引く。ごく最近も、おそらくお金の支払いで揉めたのだと思いますが、トルコの建設会社を一つ追い出したりもしていますので、そのあたりトルクメニスタンはまた別の軸で、彼ら独自の軸で動いている可能性があることを言っておきたいと思います。

■外国人労働者の割合は多くなく その影響は限定的

岡田　次に、レンティア国家としてのトルクメニスタンにおける外国人労働者の件です。たしかに下働きをする外国人労働者はいますが、その人たちと同じ仕事を、トルクメン人がまったくしていないかというと、おそらく少し違うだろうと思います。多いのはインドの人です。トルクメン人が「あの人たちはインド人だ」と言っていたのでインド人だと思いますが、もしかしたらバングラデシュとかそのあたりの人かもしれません。見た目は南アジアらしい人が、道路建設などに若干従事しています。

ただし、ものすごく割合が多いわけでもないですし、道路建設や道路掃除にトルクメン人が従事しています。とくに道路掃除は普通にトルクメン人の人たちが、ものすごく出張っていますので、必ずしも、きっちり仕事そのものを分けて、コミュニティを分けているかどうかというのはわかりません。それよりも、トルコの建設会社や、欧米、とくにフランスの建設会社などが外国人労働者を連れてきて働かせているという側面のほうが、もしかしたら強い可能性があります。ですから、その人たちからの思想的・文化的な影響は基本ないです。それよりも、おしゃれのほうを目指すようなところがあります。

和崎　どうもありがとうございます。それでは森先生よろしくお願いします。

■日本人は何を着るべきか―― 地域・時代・性別によって変化する洋装の位置づけ

森理恵　みなさまのお話がおもしろすぎて、自分への質問を忘れてしまうぐらい、すごく刺激になりました。パラレルに考えることがいいのかどうかわかりませんが、これまでまったく知らなかった国々のお話を聞いて、キモノのことを考えるヒントをたくさんいただきました。ありがとうございました。

お返事のほうですが、後藤先生と酒井先生のご質問は関係があったように思えるので、まずは帯谷先生の質問にお答えします。まずキモノ男子についてですが、インタビューはしたことがありません。あんまりしたくないような気も……。(笑) アメリカ人の研究でもありましたけれども、キモノ愛好者の帯谷先生はどちらかわかりませんが、「日本が好き」というタイプの人と、日本とかはどうでもよくて洋服とは違うおしゃれを楽しみたいという二つに分かれるのかなという気はしていますが、わかりません。

最近は多いですね。私の勤務先は早稲田大学の近くで、早稲田には「わかものきもの会」というサークルがあって、うちの学生もそこに行っていたりするので、大学生のなかにそういう流れは多いですが、まだまったく研究は及んでおりません。

べつに聞かれてもいませんが、帯谷先生が見せてくださった、ウズベキスタンの女性が外出の時にかぶる袖がついた衣装は、韓国にも日本にもそっくりのものがあります。何か関係があるのでしょうか。

酒井啓子　アジアから来た可能性がありますよね。

帯谷知可　可能性がありますかね……。

酒井　韓国を通じて。

帯谷　いや、わからないです。

森　そこでアジア本質主義になってもなんなので……。韓国のものにすごく似ていて、日本にも似たようなものがあるので、余談になりました。

帯谷先生が他の方におっしゃっているコメントを聞きながら、キモノのことを考えたのですが、日本で国家的に女性に洋装が奨励された時期というのは、おそらくないんですね。洋装から和装に戻ることはありました。徴兵制などが大きいと思いますが、男性には、「近代国家になるために洋服を着ろ」ということで、明治のはじめから洋装がすごく奨励されました。しかし、おそらく国が女性に対して「洋装をし

なさい」とか「断髪しなさい」ということは、日本ではなかったと思います（鉄漿や刺青の禁止はあった）。逆に「洋装する女性は生意気だ。やめなさい」とか、いまだったら大問題になることはありました。いまでもときどきありますけど。文部大臣が公式の場で「女性が洋服を着るのはけしからん」と言ったり、そういうことはちらほらありますが、おそらく洋装の奨励はなかったのかなと思います。

ただし、1945年を挟んだ時期に、「日本人が何を着るべきか」という議論はものすごくされています。1945年より前は、標準服や国民服の議論から始まって、「日本人は何を着たらいいんだ」みたいな、いまでは考えられないような、洋服にするのか、キモノにするのか、その折衷にするのかという議論がありました。たいてい折衷案が出てきますが、「何を着るべきか論争」のようなものが、役人から今和次郎のような人、花森安治のようなデザイナー系の人までいろいろ巻き込んでありました。

この論争は、戦後のアメリカの影響が強まるなかでも続いて、「日本人はやはりキモノ的なものを大事にしなくてはいけないんじゃないか」という話もあって、民芸運動なども絡んで展開します。そういうことを考えるときに、日本だけで考えるのではなく、サウジアラビアの話などさまざまな地域の話が出ましたが、一緒に考えていくとおもしろいことがあるのかなと思いました。

■近代化のなかで、洋服を参照しつつ多様な服が淘汰されて生まれた現代のキモノ

森　後藤先生からは、「キモノを通した関係性、キモノが周辺国をどのようにつないできたのか」というすごく難しいご質問をいただきました。「わあ、難しい」と思っていたら、そのあとで酒井先生が関係性についてご説明くださいました。よく見たら「関係性中心の融合型人文社会科学の確立」とあって、これだと思いました。キーワードなんですね。

私はこの概念をきちんとわかっていないと思うので、見当はずれかもしれませんが、まずキモノというのは、言葉の意味が変化したところで言いましたように、洋服があるからキモノがある。キモノだけで成り立っているわけではなく、洋服に対抗するものとしてのキモノという位置付けです。ですから、そもそも関係性のなかで生まれたのが現在のキモノです。

前近代には、「これが日本の服だ」などと思うことはなく、さまざまな服がありました。それが近代化のなかでだんだん淘汰されて、「これが日本の服だ」といって残ったものが、現在、成人式などで見かけるものです。あの形状のものが昔からずっとあったわけではなく、いろいろあるなかで洋服を参照しながら淘汰されて作り出されたものが現在のキモノであるという意味では、関係性のなかから生まれてきたと思います。そういう意味ではないのかもしれないですけど。

後藤絵美　おっしゃるとおりで、そのままです。

■多様な文化や要素が入り乱れる混淆から生まれた現代アジアの「民族衣装」

森　周辺国をどのようにつなげてきたのかというのは難しい質問です。からゆきさんのことを出しましたが、からゆきさんのキモノについては別でも研究しています。東南アジアで最初にキモノを着たのは、からゆきさんたちだと私は考えています。彼女たちが着ていたキモノは、東南アジアのさまざまな服と混ざり合ったものです。そのキモノと、日本軍がインドネシアを占領したときに『ジャワ・バル』などに載せたキモノとは違います。日本軍が宣伝に使うキモノはオーセンティックなキモノで、作られたキモノ像ですが、現地のからゆきさんたちのキモノは、もっと混ざり合っているというか、混淆している文化としてのキモノです。現在ではそちらのほうは忘れ去られてしまって、オーセンティックだとみんなが勝手に思っているキモノだけが残っているので、見えなくなってしまっています。当時さまざまな国からセックスワーカーたちが東南アジアにたくさん来ていたわけですが、その人たちをファッションという観点から見ていってもおもしろいのかなと思って、少し研究をしているところです。まだ答えは出ていないんですけど。

キモノではないですが、孫文が着ていた中山服、つまり日本で「人民服」と呼ばれるタイプの服（「中山」は孫文の号）については、日本の軍服が元になったとも言われるなど、いろいろ諸説入り乱れています。英語だと毛沢東が着ていたということで“Mao suit”と呼ばれています。少しずつ変わっていって、日本の軍服だったり、学生服だったり、現在でも中華人民共和国や朝鮮民主主義人民共和国では着られています。あれは何なのかという、それこそ関係性のなかで名前がいろいろあって、少しずつ形状が違っている。あ

まり関係ないことを言ってしまって答えになっていませんが、東アジアにおける関係性といったときに、キモノよりも中山服が気になっています。

民族衣装というと、キモノ、チマチョゴリ、サリーなどと分けた世界になっていますが、実態を見ていくとグチャグチャに混ざり合っているので、そのあたりについて混ざり合ったままに見ていける切り口が必要なのかなと思いました。

酒井　中山服は、オリジナルはやはり日本ですか。

森　それは先ほどご紹介した『フェイクタイワン――偽りの台湾から偽りのグローバリゼーションへ』に、諸説あるなかの一つとして書いてあります（158ページ）。中国や台湾で研究がされているようですが、諸説あって、孫文が日本で日本の学生服を見て思いついたという人もいれば、ヨーロッパの何かが元になっているという人もいます。そうではない説を唱えている人もいるらしく、結局わかりません。

でも、あれは洋服ですよね。普通に思うアジア的な要素はまったくありませんが、中国の象徴みたいになっている。しかもレーニン服（中華人民共和国初期に女性に愛用されたとされる上着。人民服にベルトを着けたようなデザイン。ソ連兵の服装を真似たと言われ、ダブルボタンのものもある）とも混ざっているので、社会主義国の服みたいでもあります。社会主義も混ざりつつ、でも元は日本の軍服ではないかというように、まったくわけがわからない状態です。

酒井　統制されたモノということで、ものすごくリンクするような感じですね。

森　何か不思議な存在で、私も気にはなりつつ、なかなかわからない状態です。

■田舎で「刺すような視線を受ける」ことの日本とパキスタンにおける意味の違い

和崎　ここからは、事実関係も含めながら、より踏み入った議論に移っていければと思います。いかがでしょうか。

森　議論が本格的になる前に、素人的な質問で申しわけありませんが、賀川さんにお聞きしたいと思います。まったく外れているかもしれませんが、田舎に行ったらジロジロ見られるというあたりのくだりで、自分のことを思い出してしまいました。田舎の親戚のところに行くと、すごい田舎なので、普段の格好をしているとジロジロ見られて、浮いてしまう。だから田舎用の服を着ていくんですね。そういうことはさまざまな場所であると思います。そういう「あるある」として捉えていいのか、それともパキスタン独特の何か、あるいはイスラーム独特の何かがあるのか、そこはいかがでしょうか。

賀川　ジロジロ見られることについては、たしかに日本でも、たとえば都市で着ているような少し奇抜なファッションを田舎に帰ったときにしていたら、すごく視線を集めることがあると思います。これはその場に従ったコードみたいなものがあって、それに外れているとジロジロ見られたりする。どうお伝えしていいのかわかりませんが、私がパキスタンに行くと、すごく見られるんです。まなざしが、かなり刺すように見られる。

森　それは性的なものですか。

賀川　いや、性的ではなくても、女性も男性もけっこう見ます。中東を研究されている先生方なら説明がもう少しうまいかもしれませんが、「見てはいけない」というコードが日本では強くて、「あ、見られているな」と思ってパッと見たら目をそらしますよね。でもパキスタンだと、見合うみたいになる。（笑）

酒井　それはかぶっていても、ジロジロ見るわけですか。

賀川　かぶっていても、たとえば自分が外国人だとわかる状態だったらもっともよく見られて、かぶっていてサングラスまでしていても――サングラスをしているのも逆に少し浮いてしまうので、「ん？」と思われて、違和感を覚えたら、けっこう見ます。

森　かぶっている、かぶっていないと関係なくということですか。

賀川　そうですね。基本的に見られる状況があります。

森　そういう文化だということですか。

賀川　そうですね……文化と言っていいかどうかわからないですが。

酒井　個別の事例になってしまいますが、かぶっていないとすごく見られますが、かぶると「見てはだめなんだ」という意識が向こうに働くので、少しそれが収まるというところはないですか。パキスタンの事例はそうじゃないですか。大学内ではかぶっていなかった人が、おっさんたちがいるようなモールに行くときにはかぶって、「かぶっているのに手を出すなよな」というメッセージになるということはないですか。

賀川　現地の方なら、おそらくすごく強いと思いますし、コードが働きやすいのですが、私は見た目も外

国人で、色などでわかるので……。さすがに全部を覆って、目なども見えない状況であれば「見られていないな」という感覚は得ましたが、自分の感覚としては、あまり……。さすがにこういう髪型をしていたら見られますが、たとえば髪の毛を縛っていて、ある程度隠していて、目までかぶっていても、見られる感じは一緒かなと思いました。

たしかに現地の方であれば、性的に見られているという感じがするのは、やはりかぶっていないときです。アバーヤを脱いでいるときなどに強いと言っているのが聞かれます。

森　それは日本で体験することとの違いは、程度の違いなのか、質の違いなのでしょうか。

賀川　コードみたいな……そこも気になっているのですが、うまく言えないところです。私が日本に帰ってきてから友だちと歩いているときに、自転車に乗った男性がこちらを見ながら通り過ぎていったんです。私はパキスタンに長くいたので、「ああ、見ているな」というぐらいに思ったのですが、友だちは「いまのはすごく失礼じゃない」と言っていました。(笑)「見ることは失礼」、「見てはいけない」ということが、自分の経験ですが日本に暮らしているとありました。しかしパキスタンでは、たしかに「見てはいけない」とクルアーンにも書いてありますが、でも見ている。見るのがすごく強いという状態はあるかなと思います。何と言っていいかわかりませんが。すみません。

後藤　地続きだと私は思います。日本だってかつては外国の人のことをジロジロ見ていたと言いますし。

森　だから、田舎へ行ってジロジロ見られるのも、よそものは見ている。自分たちの共同体内の人だったらジロジロ見るのはよくないけれども、よそもののどこか知らないやつだったら、じっと穴が開くまで見てやるみたいな。(笑) やはり地続きなのかなという感じです。

後藤　私は地域で区切りたくない派なので。

森　すみません、あまり関係ないことで。ありがとうございます。

賀川　考えておきます。

■宗主国の影響による社会階層の温存と階層が異なる男性への警戒感の可能性

磯貝真澄　私も賀川さんにおうかがいしたいと思います。社会経済的な背景について、今後の課題として と仰っているので、正確な情報をお尋ねする質問ではないのですが、ご報告を聞きながら、インフォーマントがどのような社会層の人たちなのか気になっていました。おそらくかなり上層の人たちだろうと思います。資金があるとか、地方社会における名士の家系であるとか、そういう人たちではないかと想像しました。

そのときに、彼女らは、大学生などの経済力がある程度知られている人のいるショッピングセンターなどに行けば、ヴェールやパルダを外しても問題ないけれども、市場などでは覆ったままでいるということですね。そうだとすると、これはひょっとしたらセンシティブな話かもしれませんが、社会階層が違う男性に対する警戒感の問題ではないのかと、私はお話をうかがいながら思っていました。可能性として、彼女らにそうした感覚があるのではないかと。

この想像とともに、ついでに思い出したのが、正確には記憶していないのですが、帝国論や帝国研究の分野で、宗主国のイギリスが階級社会だったために、イギリス領インド帝国では、階級といいますか、社会層のサインというものが、相当程度温存されてしまったという議論があったと思います。ひょっとすると、インドも含めてですが、かつてイギリスに統治されていた南アジア諸国では、伝統的な社会層の違いがかなり温存されており、上層の女性たちは、自分の社会層の男性たちには髪などを見せることができても、そうではない男性たちには警戒感を持ってしまうのではないでしょうか。今後研究を進められるということなので、現時点で印象として何かお持ちでしたら、お教えください。

■階層の違いに由来する意識よりも「見られている」感覚が強い

賀川　まず経済階層ですが、インタビューをしていて、私も大学に通っているぐらいだからそれなりの経済力があるのかなと思ったのですが、「月にいくら稼いでいますか」とかいうことは聞いていなくて、「親御さんは何をされていますか」という質問で推測しようと思いました。印象としては、多岐にわたっていると感じました。農村でも、地主さんなど伝統的に階級として高かった人もいますし、農家の方もいたり、経済的にはかなり異なっていました。

それから、あまりここは詳しく言えませんが、政府から奨学金をもらえる制度があって、学費が返って

くるということもあって、とくに公立大学ですと、もともとそこまで学費が高くないうえにサポート制度があるので、大学に行っているからといって必ずしもエリート・クラスではないのではないかと感じていました。

大学とショッピングセンターでの男性に対しては外すけれども、バーザールにいるような男性の前では着けるというお話ですが、まさにおっしゃっていたように、なぜそんなに変えるのかと聞くと、「すごく見られるから」と言っていて、「じゃあ、なぜバーザールの男性は見るの」と聞くと、「彼らは教育程度が低いから」という説明をする女性はかなり多くいます。それは自分が高学歴であるという状態と、出身の家族的な背景もあるのかもしれませんが、語りとしては見受けられました。

ただし、もう少し具体的な文脈に落とし込んでいくと、「自分がいつも通っている大学の学部にいる男の子たちはすごく性的な目で見てくるから、それが嫌だから絶対大学にはアバーヤを着て行っている。でもバーザールではそんなにジロジロ見られていると感じないから脱いでいる」という女性もいました。そこの基準は、自分と同じ階層なのかどうかというよりは、「見られている」という感覚のほうが強く働いているのかなと感じていました。お答えになっていないかもしれないですが、すみません。

■「見られる」ことについて 未婚・既婚の差は存在しないのか

中村朋美　賀川さんにお聞きしたいのですが、インタビューイを見ていると、未婚女性が大半で、年齢にはすごく幅があります。彼女たちは大学を出たあとに職には就いていますが、30代後半になっても大学にいて、未婚でいられるほどの経済力が持てるものなのかというのが一つ目の質問です。また、先ほどから視線の話をされていますが、未婚であるから強く反応するなど、未婚・既婚の差というのはないのでしょうか。既婚の方がすごく少ないのでデータとしては出てこないと思いますが、印象として何かあるかお聞きしたいと思います。

賀川　たとえば本調査の対象者の36歳の女性ですと、農村にある実家が学校を経営していて、帰ったらそこの先生か代表をやればいいという人です。そういった経済的な基盤がある人であることはたしかです。博士号を取っている女性のなかには、一度働いてから仕事のrequirementのために取っているという人もいて、年齢が高い女性については、やはり仕事があるなどの前提条件はあるかなと感じました。

未婚と既婚の差については、私も気になっていますが、まだ調べられていません。彼女たちがどう見られているかはわかりませんが、既婚者と話していたときに、自分の服装を決める際には、自分の夫の意見がすごく大きいと言っていました。夫の両親がたとえば「もっとアバーヤを着なさい」と言ったとしても、「夫が『べつに着なくてもいいよ』と言ったら着なくていいんだ」と言っている女性にも会ったことがあります。その女性は農村から都市に出てきて都市で暮らしている女性ですが、「結局私は自分の好きなように着ている」と言っていました。

ですから、既婚になったときに、自分の人間関係がガラッと変わってしまう。誰と一緒に行動するかというものも変わってくるので、そういうところも含めてもっと検討していきたいと思います。

中村　彼女たちに以前のことについてもどうだったのかをきいたら、年代差や時代の変化もわかるかもしれませんね。

賀川　そうですね。ありがとうございました。

＊

和崎　ご報告していただいたみなさま、コメンテーター役を務めていただいたみなさま、どうもありがとうございました。報告とディスカッションを聞いて、「装い」という鏡を通してさまざまなことが見られたという実感を私自身も持ちました。今日はお集りいただきまして、どうもありがとうございました。

ワークショップ

装いと規範 第2回

日時：2019年2月9日（土）13:30–17:40
場所：京都大学東南アジア地域研究研究所
稲盛財団記念館2階213号室（セミナー室）

プログラム

13:30-13:40 趣旨説明
帯谷 知可（京都大学東南アジア地域研究研究所）／**後藤 絵美**（東京大学東洋文化研究所）

13:40-14:30 報告1
ヴェールを纏う女性たちの語り
――現代パキスタン都市部におけるパルダ実践を事例として
賀川 恵理香（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程）

14:30-15:20 報告2
「伝統」を超えて
――現代トルクメン女性と民族衣装コイネック
岡田 晃枝（東京大学大学院総合文化研究科）

（コーヒーブレイク）

15:30-16:20 報告3
近代日本の国家主義・帝国主義とキモノ
森 理恵（日本女子大学家政学部）

16:20-16:40 コメント
後藤 絵美／帯谷 知可／酒井 啓子（千葉大学法政経学部）

16:40-17:40
ディスカッション

主　催：＊新学術領域研究「グローバル関係学」（グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて―― 関係性中心の融合型人文社会科学の確立）B01「規範とアイデンティティ」（代表：酒井啓子）
＊京都大学東南アジア地域研究研究所CIRAS共同利用共同研究・個別ユニット「社会主義を経たイスラーム地域のジェンダー・家族・モダニティ」（代表：和崎聖日）

共　催：＊京都大学東南アジア地域研究研究所CIRAS共同利用共同研究・複合ユニット「秩序再編の地域連関」（代表：村上勇介）
＊京都大学東南アジア地域研究研究所CIRAS共同利用共同研究・統括プロジェクト企画研究「アジア太平洋地域における変動動態と21世紀秩序の構築」（代表：帯谷知可）
＊京都大学東南アジア地域研究研究所環太平洋研究ハブ形成拠点（代表：村上勇介）

CIRAS Discussion Paper No.85

帯谷知可・後藤絵美編

社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族3

装いと規範2
――更新される伝統とその継承

発　行……2019年3月

発行者……京都大学東南アジア地域研究研究所
京都市左京区吉田下阿達町46　〒606-8501
電話: 075-753-7302　FAX: 075-753-9602

DTP・印刷……英明企画編集株式会社